平成27年度
慶應義塾大学体育研究所
活動報告書

特集：
・地域社会に向けたスポーツ振興
・佐々木玲子君
　　秩父宮記念スポーツ医・科学賞　奨励賞受賞

目　次

「巻　頭　言」 所長　石手　靖…… 1

Ⅰ．特集　・地域社会に向けたスポーツ振興　永田直也…… 5
　　・佐々木玲子君　秩父宮記念スポーツ医・科学賞　奨励賞受賞…… 8

Ⅱ．研究活動記録（研究委員会）
　１．個人研究業績・研究教育活動・研究助成……11
　２．所内定例研究会発表要旨……23
　３．全国大学体育連合指導者養成研修会参加報告……31
　４．浅野・所内・学事・小泉基金・未来先導基金報告書……33

Ⅲ．教育活動記録
　Ⅲ―１．授業の実施（教育委員会）
　　１．平成27年度体育科目の履修者統計……43
　　２．授業評価の実施……47
　　３．通信教育対象科目……55
　　４．塾内における授業担当……56

　Ⅲ―２．スポーツイベントの開催（スポーツ振興委員会）
　　１．塾長杯・塾内競技大会……57
　　２．公開講座……59
　　３．教養研究センター日吉行事企画委員会共催企画……59
　　４．所内施設の開放……60

　Ⅲ―３．他機関との連携
　　１．公開講座……62
　　２．一貫校連携……62
　　３．体育会支援……62

Ⅳ．業務活動記録（黒田主事）……65

巻　頭　言

大学体育研究所
所　長　石　手　　靖

このたび、平成27年度慶應義塾大学体育研究所活動報告書を発行することができました。この一年間、体育研究所では研究、教育、スポーツ振興の三つを軸として様々な活動を実施してまいりました。所員はもちろんのことですが、そのそれぞれに数多くの方々のご支援ご協力を賜りました。この場をお借りして関係各位に深く感謝し御礼申し上げます。

さて、本年１月、慶應義塾大学は、英国オリンピック委員会（以下、BOA）が2020年東京オリンピック競技会期間中のトレーニングや事前キャンプ等を日吉キャンパスにおいて実施することについて合意しました。そして２月には、BOA ならびに日本オリンピック委員会、横浜市、川崎市、慶應義塾大学の５者が覚書を締結しました。このことに先立ち、2014年６月、慶應義塾大学は、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の成功に向け、持っている資源を活用してオリンピック教育の推進や大会機運の醸成等の取り組みを進めるため、一般財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会との協定を締結しました。すなわち、慶應義塾大学は４年後の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の成功に向けて積極的に取り組んでいく姿勢を示したわけです。

体育研究所においては、BOA が昨年から数回来日をして行った事前チャンプ等の候補地視察に際し、日吉キャンパス内の運動施設を紹介して回りました。また、2020年の７月から８月にかけて BOA を受け入れた場合の授業等への影響についても話し合いの場を持ち、その結果、所員の総意を得て来たる2020年をまたとないチャンスと捉え、我々が日々実践している体育・スポーツ教育に役立てていくことを確認し、塾内においてオリンピック教育を推進することが体育研究所の使命であると認識しました。塾生や地域の方々に対して、オリンピックに対する知見を深め、オリンピックへの関わり方や様々なスポーツ種目の理解に向けた情報発信ができれば考えています。何よりも2020年に塾生であったということが一生忘れられない良い思い出となり、自身の記憶に深く残るような出会いと経験を提供できれば幸いです。

このことは、慶應義塾大学における体育研究所の目的の一つである、「行動力に溢れた塾生を育てること」に繋がるのです。

まだまだ具体的な行動には至っておりませんが、皆様からのご指導ご鞭撻を賜り、この活動を推進して行きたいと思っております。

Ⅰ．特集：

- 地域社会に向けたスポーツ振興
- 佐々木玲子君　秩父宮記念スポーツ医・科学賞　奨励賞受賞

地域社会に向けたスポーツ振興

近年、日本全国でマラソン・ジョギング大会が開催され、民間のスポーツクラブではヨガ・ピラティスクラスが人気となるなど、運動・スポーツをする人が増えているように感じる。実際、笹川スポーツ財団（2014）の調査では、調査対象の47.5%が週２回以上運動していることが報告されている。およそ50%という値は、ここ３回（2010年：49.1%、2012年：49.3%、2014年）の調査において示され、高い運動・スポーツ実施率が維持されていることがわかる。また、2020年に東京オリンピック・パラリンピックも開催されることが決まり、今後は、観戦、ボランティア活動も含めた、「する」、「観る」、「支える」の３種類の関わり方で、運動・スポーツ活動が賑わうと予想される。

体育研究所では、地域に向けて公開講座、イベントを企画し、地域社会に向けたスポーツ振興を図ってきた。体育研究所にとって地域の方がより健康で豊かな生活を送るための多様な運動・スポーツ活動を提供することは、地域に根付く大学の、運動・スポーツの実践・研究に携わる研究所の使命として捉えている。今回の特集では、今年度開催した企画を中心に振り返り、これまでの地域に向けた活動と今後の活動の方向性について述べる。

公開スポーツ教室

スポーツ教室は、様々なスポーツを行う、学ぶ機会を提供する場として最も一般的な企画である。体育研究所では、これまでに公開スポーツ教室として、ジョギング、水泳、バドミントン、エアロビクス、ヨガ、ピラティスといった種目のスポーツ教室を開講してきた。その中で、近年最も人気があった種目は、ヨガとピラティスである。

ヨガとピラティスは、平成24年度から開講し、形態を変えながら継続して開催している。ヨガとピラティスは、静的な動きを行う中で、リラックスと筋肉の強化を図るエクササイズである。この２つのエクササイズは開講より人気の教室であり、使用施設の定員がおおよそ20名のところ、平成24年度：22名、平成25年度：21名、平成26年度：21名、平成27年度：15名・17名とほぼ定員までの参加者が集まっている。また、開講当初は、広報の不足もあってほぼすべての参加者が塾内の関係者であったが、近年は、およそ３分の１の参加者が地域の方となり、地域に公開されたスポーツ教室となってきている。

スポーツ教室は、そのスポーツを始めるきっかけや、専門家から指導を受けてその後の活動に生かすことを目的に参加することが多い。ヨガやピラティスは一人でも参加し継続することができる種目だが、今後は、そのような種目だけでなく、様々な形態の種目でも実施することを考えていきたい。スポーツは、種目ごとに学ぶスキルや共に参加する人との関わり方が変わり、そこで楽しさも変わる。スポーツの多様な楽しさを提供していくことで、スポーツを通じた豊かな生活の形成に貢献していく。

慶應義塾大学読売新聞公開講座

体育研究所は、スポーツ医学研究センターと読売新聞横浜支社とともに、公開講座を開催している。これまで開催された講演のテーマ、講師は表１に示した。講演は、スポーツの起源、オリンピリズム、武道、テニスといった座学を中心とした内容から陸上競技場を使用した運動実践など、幅広い内容を行っている。参加人数は、回によって差はあるが、100名前後の方にご参加いただいている。

スポーツにおける「する」、「観る」は、最もイメージしやすく、関わりやすい方法である。その内容は、専門的な知識を持って関わ

ると、非常に奥深いものとなる。元トッププレイヤーでしか感じられない感覚、専門的な調査によってわかる１つのプレー・試合にある背景など、これまでと違った視点から「する」、「観る」ことができる。このような普段とは違った「楽しみ方」を提供することで、スポーツ文化の奥行きを感じていただきたいと考えている。今後も、スポーツ医学研究センター、読売新聞社との共催だけでなく、体育研究所単体としての公開講座の開講を目指していきたい。

表１　慶應義塾大学読売新聞社公開講座のテーマと体育研究所担当講師一覧

年　度	テーマ	講　師
平成23年度	「ウォーキングの楽しみ」	近藤明彦
	「スポーツと遊びに関する文化的考察」	村山光義
	「中高年のための山歩き入門」	野口和行
	「比較惑星学的思考法から考えるスポーツ 〜何がわかっていて、何がわかっていないのか〜」	鳥海　崇
平成24年度	「スポーツ文化、再発見の旅」	村山光義
	「武道の心・技・体〜剣道における伝統の技術を見る」	吉田泰将
	「テニスをもっと楽しもう」	村松　憲
平成25年度	「トップアスリートの心の中はどうなっているのか？ 〜大舞台で実力を発揮する秘訣を探る？」	永田直也
平成26年度	「スポーツ文化から オリンピックを理解する」	村山光義
	「ニュースポーツを体験してみよう」	野口和行 板垣悦子
平成27年度	「錦織圭がツアー転戦する世界男子プロテニスツアーにおける情報戦略」	坂井利彰
	「陸上競技場でスポーツ体験―オリンピック会場の広さを体感しよう―」	野口和行 板垣悦子

オトナのスポーツテスト2015

本年度は、読売新聞本社が主催する「オトナのスポーツテスト2015」に、特別協力として、会場の運営、ボランティア協力を行った。本企画は、20歳以上65歳以下の成人に対し、小・中学校で実施している文部科学省新体力テストを実施する機会を提供することで、自身の体力と運動・スポーツ習慣に目を向け、今後の生活に活かしてもらう企画である。体育研究所としては、成人の健康・スポーツ習慣に貢献できると考え、日吉キャンパスでの

開催に関する種々の協力を行った。

企画当日は、参加者の応援も含め3000名を超える方が日吉キャンパスの体育施設に詰め

かけ、日々の生活では味わうことができない楽しさと悔しさを感じたようである。我々は、18歳から25歳程度までの塾生を対象に指導していることがほとんどである。その中、大人が真剣に自己の能力の限界に挑戦している姿は、運動・スポーツに全力で取り組むことに年齢は関係なく、いつまでたっても人を熱くさせてくれることを改めて感じた。今後は、同規模で同じことをすることは難しいが、地域の方がスポーツで熱くなる機会が提供できる企画を考えていきたい。

ママサカス2016

3月には、TBSからの依頼で、小さな子どもを持つ母親向けの企画「ママサカス2016」における運動ブースの監修、指導を行った。本企画は、子育てママを応援する企画として、子どもが様々な体験をして「できた！」の感動を親子で感じる企画である。実際に体育研究所が関わった内容は、① 運動ブースのコンセプトに関する打ち合わせ・提言、② 親子ヨガ、コーディネーショントレーニングの指導である。また、運動・スポーツに関連する専門家を紹介し、実際に講演・指導をしていただいた。

親子ヨガ、コーディネーショントレーニングの指導は、親子ヨガでは非常勤所員の杉本亮子君に、コーディネーショントレーニングでは同じく西室陽君にご協力いただいた。実際に指導にあたった日は2日間だが、親子が様々な動きの中で触れ合い、楽しんでもらえることができたと感じた。また、参加している保護者からは、今後、子どもと一緒にどのような運動をしていけばよいかという質問もあり、運動やスポーツに対する興味が高いことがうかがえた。体育研究所では、これまでに子どもの運動・スポーツを中心とした企画を実施したことが少ない。このような保護者の高い興味に応える企画を計画していきたい。

最後に

本年度は、地域に向けたスポーツ振興として、様々な年代に対し、多様な内容を提供した。これまでは、塾生や教職員を対象にした企画が中心で、地域の方へスポーツを振興する機会は少なかった。今後は、本年度実施した各種企画のように、多くの方の生活にとってスポーツが身近な存在となるように計画をしていきたい。

参考文献

笹川スポーツ財団著（2014）スポーツライフ・データ2014：スポーツライフに関する調査報告書．笹川スポーツ財団；東京．

佐々木玲子君　秩父宮記念スポーツ医・科学賞　奨励賞受賞

佐々木君は、平成28年３月23日に秩父宮記念スポーツ医・科学賞　奨励賞を受賞した。受賞理由は、「アクティブ・チャイルド・プログラム普及・啓発プロジェクト」（班長：富田寿人氏）の一員として、子どもたちが楽しみながら望ましい動きを習得するプログラムを開発・普及したことによる。

同賞は、日本体育協会がスポーツへの造詣が深かった故秩父宮殿下に関わり、同妃殿下からの御遺贈金をもとに基金を設立し、スポーツの向上と振興には欠くことのできないスポーツ医・科学の分野を対象にした「秩父宮スポーツ医・科学賞」を創設した。奨励賞は、スポーツ医・科学についてよく研究し、その研究成果が十分にスポーツの現場に活かされ、我が国スポーツの普及発展及び競技力の向上に顕著な実績をあげた者又はグループが対象となる（上記、賞の説明は、日本体育協会ホームページから改変し、記載した）。

Ⅱ．研究活動記録

（研究委員会）

１．個人研究業績・教育業績・研究助成

石手　　靖　【教授】

著書・論文・執筆・報告書

（報告書）

・石手靖，鳥海崇，坂井利彰，加藤幸司，須田芳正，吉田泰将，山内賢，森文彦，“学生のスポーツ行動と大学におけるスポーツ「研究を通じた塾体育会の支援策～マウスガードによる受傷防止の実態調査～」”，慶應義塾大学体育研究所平成27年度基盤研究レポート，慶應義塾大学体育研究所：4-5，2016.

学会発表等

・村山光義，石手靖，植田史生，須田芳正，福士徳文，“スポーツ科学分野の LLLT 研究トピック2015” 第19回日本レーザー・スポーツ医科学学会 Annual Report（東京），2015.12.12

・福士徳文，村山光義，石手靖，植田史生，須田芳正，“スポーツ競技団体の医科学サポートに関する現状” 第19回日本レーザー・スポーツ医科学学会（東京），2015.12.12

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（役職）

・日本バレーボール学会理事長
・日本レーザー・スポーツ医科学学会理事
・大学ライフスポーツ教育学会理事
・横浜ビーチバレーボール連盟理事

研究助成等

・“身体知・障がい理解教育プログラムの開発・改善と KEIO フットサルアドベンチャー 2015の開催”，調整予算（日吉）プロジェクト事業，49万円.

植田　史生　【教授】

学会発表等

・村山光義，石手靖，植田史生，須田芳正，福士徳文，“スポーツ科学分野の LLLT 研究トピック2015” 第19回日本レーザー・スポーツ医科学学会 Annual Report（東京），2015.12.12

・福士徳文，村山光義，石手靖，植田史生，須田芳正，“スポーツ競技団体の医科学サポートに関する現状” 第19回日本レーザー・スポーツ医科学学会（東京），2015.12.12

研究助成等

・“剣道の国際交流およびハーバード大学教育制度の体験プログラム”，未来先導基金公募ポログラム，2,612,000円

当年中の研究教育活動の概要

１年間の大学特別研究期間の適用により、剣道の外国人指導者の審判技術に関して調査をするために、「剣道における外国人指導者の審判技術に関する意識調査」という質問紙を作成し、６月から10月にかけてドイツにおいて調査を実施した。帰国後、分析、検討を行っている。

近藤　明彦　【教授】

著書・論文・執筆・報告書

（論文）

・近藤明彦，加藤大仁，佐々木玲子，永田直也，山内賢，“体育授業における個人種目と集種目の違いと授業前後におけるモチベーションの変化について”（資料論文），第55巻第１号，25-27，2016

学会発表等

- Naoya Nagata, Ken Yamauchi, Reiko Sasaki, Hirohito Kato, and Akihiko Kondo, "Influences of different sport types on student motivation in college physical education classes", ISSP 50th ANNIVERSARY INTERNATIONAL SEMINAR "A Bridge From the Past to the Future", Roma, 19–20, April 2015
- Satoshi Matsuoka, Masanori Takahashi, Akihiko Kondo, "Visual Search Strategy against Marche Fente Movement of Opponent by Fleuret Player of Fencing", ISSP 50th ANNIVERSARY INTERNATIONAL SEMINAR "A Bridge From the Past to the Future", Roma, 19–20, April 2015
- 永田直也，近藤明彦，"学生が見た授業時に「教師が果たす機能」について"，日本スポーツ心理学会第42回大会，九州共立大学，2015年11月

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講演）

近藤明彦，"ドイツスポーツ心理学の特徴" 日本体育学会体育心理学専門領企画特別セミナー，国士舘大学，2015年 9 月

佐々木玲子 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

（論文）

- 佐々木玲子，" 3 軸加速度計を用いた幼児の自由遊び中の活動水準評価"，慶應義塾大学体育研究所紀要，55巻：7–15，2016.
- 近藤明彦，加藤大仁，佐々木玲子，永田直也，山内賢，"体育授業における個人種目と集団種目の違いと授業前後におけるモチベーションの変化について"，慶應義塾大学体育研究所紀要，55巻：25–27，2016.
- 佐々木玲子，"幼児に必要な動きの発達に関するエビデンス"，体育の科学，65巻 4 号，241–246，2015.
- 佐々木玲子，"体育授業における動作分析の利用"，体育の科学，65巻 6 号，435–439，2015.

（取材協力）

- 佐々木玲子，"なぜ，女性スポーツの二極化？ ① 医・科学的要因"，Sports Japan，公益財団法人日本体育協会：2–3，2016.

学会発表等

- Sasaki R, Ishizawa J, "Behavioral differences in preschool children with varying levels of movement abolity during freeplay" 20th Annual Congress of the European College of Sport Science, Malmo, June
- 佐々木玲子，石沢順子，"幼児の運動能力と自由遊び中の出現動作との関係"，日本体育学会，国士舘大学，2015年 8 月
- 石沢順子，佐々木玲子，吉武裕，"幼児と保育者の日常身体活動量の関係"，日本体力医学会，和歌山大学，2016年 9 月
- 佐々木玲子，"身体能力の発達からみた運動の至適時期"（シンポジウム：「多領域から見た発達の至適時期」），日本発育発達学会，神戸大学，2016年 3 月
- 石沢順子，佐々木玲子，松嵜洋子，吉武裕，"幼児の日常身体活動量の経年変化"，日本発育発達学会，神戸大学，2016年 3 月

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講演）

- 佐々木玲子，"子どもたちの心と体を育むために今求められていること"，県立体育センター研究講座／心と体の健康教育研修講座「心と体の健康」，神奈川県立体育センター， 7 月
- 佐々木玲子，"子どもたちがよりよい運動機会をもつために"，第 3 回女性スポーツ勉強会，東京ウィメンズプラザ， 8 月
- 佐々木玲子，"2020年東京オリンピック・パラリンピック競技会を機に今後のスポーツによる青少年の健

全育成について考える／幼少期における運動・スポーツの指導をとおして”，ジュニアスポーツの育成と安全・安心フォーラム（パネルディスカッション・シンポジスト），グランフロント大阪，12月
・佐々木玲子，“アクティブチャイルドプログラム～その活用に向けて”，日本女子テニス連盟総会，東京体育館，12月
・佐々木玲子，“健康な心と体を育てるために大切なこと”，公益財団法人日本学校体育研究連合会研究指定園研究報告会，江戸川区立船堀幼稚園，11月

（講師）
・佐々木玲子，“青少年期の成長発育と運動”，健康運動指導士養成講習会，東京，５月，12月
・佐々木玲子，“指導実習・評価”，日本体育協会ジュニアスポーツ指導員養成講習会，上尾市，11月
・佐々木玲子，“幼児期からのアクティブ・チャイルド・プログラム普及講習会”，上尾市，11月，金沢市，１月
・佐々木玲子，“動きの発達とスキルの獲得”，すぎなみスポーツアカデミー指導員養成講習会，杉並区，10月
・佐々木玲子，“新体力テストの効果的な活用～アクティブチャイルドプログラムの紹介～”，川崎市児童生徒新体力テスト指導者講習会，川崎市立上作延小学校，２月
・佐々木玲子，“ダンススポーツのバイオメカニクス／子どもの発育発達とダンススポーツ”，日体協公認競技別指導者養成講習会（ダンススポーツ専門科目），江東区，12月

（役職）
・日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会委員
・日本体育協会指導者育成専門委員会委員
・横浜市スポーツ推進審議会委員
・東京体育学会常任理事
・比較舞踊学会副会長
・日本子ども学会理事
・日本体育協会「アクティブチャイルドプログラム普及啓発事業」有識者会議委員
・笹川スポーツ研究助成選考委員会委員
・「子どもと発育発達」編集委員
・日本体育学会代議員
・筑波大学・鹿屋体育大学『大学体育スポーツ高度化共同専攻』外部評価委員会委員

（受賞）
・アクティブ・チャイルド・プログラム普及・啓発プロジェクト（プロジェクトメンバー），第18回秩父宮記念スポーツ医・科学賞奨励賞，公益財団法人日本体育協会

研究助成等
・“幼児の基本的動作習熟度及び活動動作水準に応じた運動プログラムのための基礎的研究”，科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金），（25350943），80万円.
・“下肢および足部への加重負荷からみた各種スポーツの動作特性”～安全なスポーツ実施を目指して～，平成27年度慶應義塾学事振興資金（共同研究，代表），123万円.

綿田　博人　【教授】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（役職）
・慶應義塾体育会副理事

村山　光義　【教授】

学会発表等
・永岡学，内山孝憲，村山光義，“超音波画像装置を用いた筋硬度計測系の構築” 第54回日本生体医工学会（名

古屋市），2015.5.9
・村山光義，“スポーツ科学分野における LLLT・LEDT 研究の動向” 第27回日本レーザー治療学会（東京），日本レーザー治療学会誌 Vol.14，P56，2015.6.14
・村山光義，“筋硬度計測の意義と押圧式筋硬度計測の実際”，東京体育学会第89回研究会　骨格筋の「硬さ」研究最前線（早稲田大学），2015.7.3
・Murayama M, Nosaka K, Inami T, Shima N, Yoneda, “Resting muscle hardness of biceps brachii assessed by a pressure meter in comparison to real time Elastography” 20th Annual congress of the European College of Sport Science（Sweden）, Book of abstracts p363, 2015.6.26
・Inami T, Murayama M, Shima N, Nosaka K, “Relationship between contraction intensity and muscle hardness assessed by real-time tissue elastography for the elbow flexors at different joint angles” 20th Annual congress of the European College of Sport Science（Sweden）, Book of abstracts p363, 2015.6.26
・Shima N, Murayama M, Inami T, Nosaka K, “Difference between mechanomyographic and electromyographic responses to isometric contractions of biceps brachii at different elbow joint angles” 19th Annual congress of the European College of Sport Science（Sweden）, Book of abstracts p363, 2015.6.25
・村山光義，稲見崇孝，島典広，米田継武，“押圧型筋硬度計と超音波エラストグラフィによる筋収縮中の上腕二頭筋硬度の比較”，第70回日本体力医学会（和歌山市），体力科学64（６），p711，2015.9.23
・村山光義，石手靖，植田史生，須田芳正，福士徳文，“スポーツ科学分野の LLLT 研究トピック2015” 第19回日本レーザー・スポーツ医科学学会 Annual Report（東京），2015.12.12
・福士徳文，村山光義，石手靖，植田史生，須田芳正，“スポーツ競技団体の医科学サポートに関する現状” 第19回日本レーザー・スポーツ医科学学会（東京），2015.12.12

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（役職）
・慶應義塾大学日吉キャンパス　Hiyoshi Reaserch Portfolio 実行委員
・日本レーザー・スポーツ医科学学会　事務局代表
・一般社団法人日本バイアスロン連盟　科学委員
・日本オリンピック委員会強化スタッフ

研究助成等

・“筋損傷後の筋硬度と elastography 法による筋弾性特性の関係”，文部科学省科学研究費（基盤研究（C）），（課題番号：25350822），130万円
・“下肢および足部への加重負荷からみた各種スポーツの動作特性～安全なスポーツ実施を目指して～（研究代表者：佐々木玲子）”，学事振興資金（共同研究），123万円

当年中の研究教育活動の概要

当年は、文部科学省科学研究費の助成３年目のまとめとして、オーストラリアの Edith Cowan University に４週間滞在し筋硬度計測をテーマに共同研究を推進した。また、所内の基盤研究においては研究委員長として「平成27年度基盤研究レポート」発行を取り纏めた。

加藤　大仁　【教授】

著書・論文・執筆・報告書

（研究資料）
近藤明彦・加藤大仁・佐々木玲子・永田直也・山内賢「体育授業における個人種目と集団種目の違いと授業前後におけるモチベーションの変化について」慶應義塾大学体育研究所紀要　第55巻第１号：25-27，2016.

学会発表等

Naoya Nagata, Ken Yamauchi, Reiko Sasaki, Hirohito Kato, Akihiko Kondo, “Influences of Different Sport Types on Student Motivation in College Physical Education Classes”, ISSP 50th ANNIVERSARY INTERNATIONAL SEMINAR “A Bridge From the Past to the Future”, Roma, 19-20, April 2015

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

日本バスケットボール協会指導者育成委員会委員（～2015年９月）

（講師）

日本体育協会公認スポーツ指導員兼日本バスケットボール協会公認コーチ養成講習会講師

2015年11月29日　　依頼元　埼玉県バスケットボール協会

山内　　賢　【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

（著書）

・伊藤義昭，杉浦伸郎，三浦望慶，柴田竜文，校條　諭，谷津祥一，山内　賢，山下和彦，桜井良太，藤原佳典，多田羅浩三，“シニア向けノルディックウォーキング・ポールウォーキング GUIDEBOOK　超高齢社会のウォーキング・イノベーションの知識と技術、そして展開方法”，ライフ出版社，2015.

（論文）

・山内　賢，“慶應義塾大学体育実技「フィットネストレーニング」履修者における骨格筋量と筋力トレーニング種目別最大筋力（１RM）の実態調査報告”，慶應義塾大学体育研究所紀要，第55巻第１号：17-23，2016.

・近藤明彦，加藤大仁，佐々木玲子，永田直也，山内　賢，“体育授業における個人種目と集団種目の違いと授業前後におけるモチベーションの変化について”，慶應義塾大学体育研究所紀要，第55巻第１号：24-27，2016.

（執筆）

・山内　賢，“スマートウォーキング（スマ歩）のすすめ”，Walking PLUS vol 8，一般社団法人日本ポールウォーキング協会：10-11，2015.

（報告書）

・杉浦伸郎，山内　賢，“町田山崎団地におけるスマートウェルネス UR プロジェクト報告書”，一般社団法人日本ポールウォーキング協会：1-11，2015.

学会発表等

・山内　賢，市河　勉，荻田　亮，田村浩志，杉浦伸郎，“高齢者が行う Pole Walking の運動処方を歩幅、反応時間、重心動揺、運動強度で探る事例研究”，第74回日本公衆衛生学会総会，長崎ブリックホール他（長崎市）2015年11月４日・５日・６日，日本公衆衛生雑誌第62巻 第10号特別付録 第74回日本公衆衛生学会総会抄録集：540，2015.10.

・山内　賢，市河　勉，荻田　亮，柳川郁生，溝口絵里加，杉浦伸郎，“高齢者が行うポールウォーキングの効果―バランス機能を Game 機で測定評価した事例―”，第70回日本体力医学会大会，和歌山県民文化会館他（和歌山市），2015年９月18日・19日・20日，第70回日本体力医学会大会予稿集：268，2015.8.

・丸田　巖，山内　賢，“男子高校生の BLS（Basic Life Support）再講習に関する意識調査― 2 年間の事例として―”，第70回日本体力医学会大会，和歌山県民文化会館他（和歌山市），2015年９月18日・19日・20日，第70回日本体力医学会大会予稿集：323，2015.8.

・丸田　巖，山内　賢，“BLS（Basic Life Support）教育受講生の意識調査”，日本体育学会第66回大会，国士舘大学世田谷キャンパス（東京都世田谷区），2015年８月25日・26日・27日，日本体育学会第66回大会予稿集：348，2015.

・Naoya Nagata, Ken Yamauchi, Reiko Sasaki, Hirohito Kato, Akihiko Kondo, “Influences of Different Sport Types on Student Motivation in College Physical Education Classes”, ISSP 50th ANNIVERSARY INTERNATIONAL SEMINAR “A Bridge From the Past to the Future”, Roma, 19-20, April 2015.

・Ken Yamauchi, Hiroshi Tamura, Tsutomu Ichikawa, Ikuo Yanagawa, Akira Ogita, Akiko Sakai, Oka Suzuki, Shinro Sugiura, “Assessing Fitness in Older Adults Using Wearable Cameras : Arm Swing Technique for Pole Walking”, The Gerontological Society of America 68th Annual Scientific Meeting, Orlando, FL（USA），

2015. Nov18–22, Program：128, 2015.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講演）

・山内　賢，“ポールウォーキングのテクニックをウェアラブルカメラで覗いてみよう～運動の見える化～”，マスターコーチ養成２DAY 研修，ポールウォーキング協会鎌倉本部テラススタジオ121，2015年12月５日，６日.

（講師）

・山内　賢，“めざせ体育のヒーロー～ひみつの特訓～”，SFC 秋山研究室ゼミ「自由研究おうえん隊」，鶴岡市朝暘武道館（山形），2015年８月３日.

・山内　賢，“ノルディックウォーキングとポールウォーキングの類似性と特殊性”，日本ポールウォーキング協会指導者研修会，一般社団法人　日本ポールウォーキング協会，横浜市健康福祉総合センター，2015年７月２日.

・山内　賢，“ポールウォーキングで健康アップ～目指そう生涯現役～ in 腰越”，体力測定会（主催：鎌倉市市民健康課，共催：地域包括支援センター聖テレジア），鎌倉リハビリテーション聖テレジア病院，2016年２月２日，３月22日.

研究助成等

・“フィットネスウォーキングにおける運動処方を探る～反応時間と歩行能力～” 体育研究所内研究費，762,912円.

当年中の研究教育活動の概要

山内は、ポールウォーキング実施後の様々な運動効果を計測し、適切な運動処方の作成を手掛けている。以下はポールウォーキングの運動処方作成に関与する今年度の成果である。

高齢者が「生活の自立」を獲得するためには、一定レベルの生活活動力を確保しなければならない。生活活動力は加齢とともに低下する可能性があるので、活動能力レベルを判定して、適切な運動処方を実行する必要がある。また、運動プログラム効果を確認するためにも定期的に体力を測定して、プログラムの妥当性を精査する必要性がある。生活活動力低下のひとつに「情報・刺激に対する安全の確認・判断」や「障害物に対する危険回避」などの情報処理が考えられるので、このたび独自の反応時間測定器を開発した。日常生活における危機回避能力や転倒を予見するスクリーニングは、反応時間で評価できる。フラッシュを用いた単純反応は一般的である。高齢者は視覚をはじめとする感覚機能が鈍くなることが考えられるので、光だけでの刺激だけで測定することが難しい。今回開発した反応時間測定器は、光に加えて、音、振動に対する反応時間が測定できる測定器をデザインした。フラッシュと音に関しては、色、周波数を変えられるようにして、ダブルタスクの課題に関する反応も計測できる。データはパソコンにファイリングできるように設計した。今後は、高齢者のポールウォーキング実践による歩行機能と反射反応機能の関係をモニタリングする分析に活用して、「高齢者の生活活動能力改善に貢献するポールウォーキングの効果」のエビデンスを追及していく。

吉田　泰将　【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

（DVD）

・吉田泰将　監修・出演，“剣道審判法と有効打突”，ティアンドエイチ，2015.4

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（役職）

・日本武道学会　評議員　通年
・一般財団法人全日本剣道連盟　評議員　通年
・一般財団法人全日本剣道連盟　普及委員会学校教育部会・委員
・一般財団法人全日本剣道連盟　社会体育指導員養成講習会　講師　通年

・一般財団法人全日本学校剣道連盟　常任理事・事務局長　通年
・第57回全国教職員剣道大会（京都）　総務委員長　（2015.8.9）
・全日本学生剣道連盟・関東学生剣道連盟　審判員　通年
・全日本学連剣友会　事務局長　通年
・関東学連剣友連合会　理事長　通年
・東京学連剣友連合会　理事　通年
・慶應義塾体育会剣道部（三田剣友会）副師範　通年
・慶應義塾大学医学部体育会剣道部　師範代行　通年

（資格）
・一般財団法人全日本剣道連盟　剣道教士八段

（大会出場）
・第15回　寛仁親王杯剣道八段選抜剣道大会　（2015.9.5）

当年中の研究教育活動の概要

文部科学省委託事業・武道等指導支援強化委員会の委員として、中学校授業協力者の養成とデータベースの構築や授業協力者を活用した授業の視察を行い、さらにアンケート調査やインタビューにより現場の実態を明らかにしていく活動を行っている。

板垣　悦子　【准教授】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講師）
・“東京五輪を考える～ジュニアアスリートの育成～”，慶應義塾大学・読売新聞社
市民講座，慶應義塾大学　日吉キャンパス　陸上競技場，2015年７月11日.
・“健康つくり教室”，慶應義塾大学薬学部　港区スポーツふれあい文化健康財団，慶應義塾大学　芝共立キャンパス，2015年６月～2016年１月　６/17，７/15，８/19，９/16，12/16，１/20.
・公開講座「ピラティス」，慶應義塾大学体育研究所公開講座，慶應義塾大学　日吉キャンパス協生館　エクササイズスタジオ．2015年５月14日，21日，28日.

当年中の研究教育活動の概要

研究活動はテーマ「授業ジャーナルから探るピラティスの効果」を柱とし、ピラティスの継続から得られる身体的および心理的な効果を言葉の変化から検討するために、授業初回に「目的」を、毎回の授業終了時に心身の「気づき」を、最終回には目的に対する結果を記入してもらい分析した。またアメリカの大学生（カリフォルニア州立大学サンノゼ大学）と本学生で目的や授業後の結果に違いはあるのか等の比較、分析を行なった。

教育活動はサークル「天通合氣道会」の会長として出来るだけ学生と密にコミュニケーションを取れるように練習見学、ミーティングなどを積極的に行うようにした。

加藤　幸司　【准教授】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講師）
・平成27年度　公益財団法人日本体育協会公認指導員養成講習会講師（専門科目），神奈川，2015年11月
・平成27年度　公益財団法人日本体育協会公認コーチ専門科目（後期）講習会講師（バドミントン），埼玉，2016年１月
・早稲田大学オープン教育センター講師（非常勤），春学期

（役職）
・慶應義塾大学体育会バドミントン部女子監督

須田　芳正　【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

（論文）

・福士徳文，吉村雅文，須田芳正，青葉幸洋，石原美彦，井口祐貴，“足趾把持筋力と第５中足骨疲労骨折の関係の検討：シーズンの期分けに着目して”，慶應義塾大学体育研究所紀要，第55巻第１号，2016.1

（監修）

・須田芳正　岩崎　陸“みるみる上達！ スポーツ練習メニュー２　サッカー”，ポプラ社，2015年４月

学会発表等

・福士徳文，河村剛光，吉村雅文，須田芳正，石原美彦，“大学サッカーチームにおける体力測定の実態”，第28回日本トレーニング科学会大会（鹿屋体育大学・鹿児島），2015.11

・村山光義，石手靖，植田史夫，須田芳正，福士徳文 “スポーツ科学分野の LLLT 研究トピック2015”，第19回日本レーザー・スポーツ医科学学科　Annual Report，（東京）2015.12.12

・福士徳文，村山光義，石手靖，植田史夫，須田芳正 “スポーツ競技団体の医科学サポートに関する現況”，第19回日本レーザー・スポーツ医科学学科　Annual Report，（東京）2015.12.12

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講師）

・早稲田大学オープン教育センター講師（非常勤），通年

（役職）

・慶應義塾大学体育会ソッカー部監督

野口　和行　【准教授】

学会発表等

・石田易司，竹内靖子，野口和行，多田聡，信達和典，中野堅太 “障がい者キャンプの運営をどうするか” 日本野外教育学会第18回大会自主企画シンポジウム，熊本，2015年６月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講師）

・（独）国立赤城青少年交流の家，教育事業「あかぎサンサンかがやきキャンプ」指導講師，2015年６月.

・（公財）日本教育科学研究所アウトドアゲーム指導法講習会，国立赤城青少年交流の家，2015年10月.

・（公社）日本キャンプ協会キャンプディレクター１級養成講習会，国立オリンピック記念青少年総合センター，2015年11月.

・自然体験活動指導者養成研修会，“自然体験活動の指導” 国立赤城青少年交流の家，2015年11月.

（役職）

・大学スケート研究会理事長

・日本野外教育学会理事

・（公財）日本教育科学研究所自然体験活動推進委員

・（公社）日本キャンプ協会キャンピング編集タスク

・独立行政法人国立青少年教育振興機構特別事業「青少年教育施設におけるユニバーサルデザインの開発と活用」委員

村松　　憲　【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

（論文）

・村松憲，高橋仁大，梅林薫，“世界トップクラステニス選手のフォアハンドグラウンドストロークにおける速度と回転量の関係について”，スポーツパフォーマンス研究，7：292-299，2015.

（著書）

・村松憲（分担執筆，日本テニス協会編），“テニス指導教本Ⅰ，第２章「テニスの技術」の中の「2-1．テニスの技術構造とその仕組み」「2-4．グリップ」「2-5．基礎技術と応用技術」”，大修館書店，2015.

学会発表

・村松憲，高橋仁大，梅林薫，“世界トップクラステニス選手のフォアハンドにおける速度と回転量について”，日本体育学会第66回大会，東京都（国士舘大学），2015年８月

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講演）

・村松憲，“平成27年度公認上級コーチ専門科目講習会”，バイオメカニクス，東京都（ナショナルトレーニングセンター），2016年２月.

（メディア監修・協力）

・村松憲（分担監修・協力），“NHK スペシャル「錦織圭　頂点への戦い」”，2015年６月

（メディア出演）

・村松憲（分担出演），“NHK BS1 ：ザ・データマン～スポーツの真実は数字にあり～ “0.37秒の駆け引き 錦織圭　知られざる予測能力” ”，2015年５月

（役職）

・公益財団法人日本オリンピック委員会　強化スタッフ（情報・戦略スタッフ），通年
・公益財団法人日本テニス協会　強化情報・科学委員会委員，通年
・公益財団法人日本テニス協会　コーチング委員会常任委員，通年
・日本テニス学会　運営委員会委員

研究助成等

・“下肢および足部への加重負荷からみた各種スポーツの動作特性～安全なスポーツ実施を目指して～（研究代表者：佐々木玲子）”，学事振興資金（共同研究），123万円

当年中の研究教育活動の概要

体育研究所基盤研究1-1班の班長として当年度は「ライフスキル」に着目し、体育実技がライフスキルに及ぼす影響について検討した。次年度に、結果をまとめる予定である。

前年度まで、世界トップレベルテニスにおけるサービスを対象に、ボールの回転量と速度の関係について研究を行ってきたが、当年度は世界ランキング１位選手のフォアハンドグラウンドストロークを対象とする研究を行った。フォアハンドについてはサービスと異なり、テニスコート内での打球位置が毎回異なり、データの収集はサービス以上に困難であったが、多くの方々の多大なご協力により、研究を進めることができた。

前年度に引き続いて体育実技「テニス」授業において、「感謝できることをみつける」という実習を毎回授業開始時に行った。授業最大の目標が「テニスを楽しむ」ということにしており、そのためにも「感謝」の気持ちが大変有効であるという考え方からスタートした実習であるが、学期終了時の無記名アンケートにおいてこの実習に対する肯定的な意見が多く見られたことから、実技時間を減らしてまでこの実習を行うことに対する理解が概ね得られていると感じた。今後も取り組みを続けていく予定である。

鳥海　　崇　【専任講師】

当年中の研究教育活動の概要

秋学期よりケンブリッジ大学ダウニングカレッジに訪問研究員として留学中。ケンブリッジ大学とオックスフォード大学との各スポーツ競技の対抗戦である「バーシティマッチ」について、歴史及び教育的意義について早慶戦との比較研究がテーマ。

奥山　靜代　【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

（その他）

・加賀谷淳子，奥山靜代，中村芙美子 “血流アップの「自転車体操」” 血管力で若返る！．NHK ためしてガッテン，主婦と生活者：46頁，2016年３月．

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

・奥山靜代, “加賀谷淳子先生と研究と私”，健康･スポーツ科学女性研究者ネットワーク，お茶の水女子大学，2015年12月．

・健康・スポーツ科学女性研究者ネットワーク（NeWS）世話人

研究助成等

・“体育実技履修者における身体活動量に関する研究”，慶應義塾大学体育研究所内個人研究費，32万円．

坂井　利彰　【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

（著書）

・坂井利彰，“松岡修造さんと考えてみた　テニスへの本気” 東邦出版，2015年８月

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講師）

・公益財団法人世田谷区スポーツ振興財団・こどもの体力・基礎運動能力向上事業・世田谷区ジュニアアカデミー（テニス）総合監修

（講演）

・公益財団法人日本テニス事業協会カンファレンス『データを活用した育成戦略モデル～世界トップ100入りするための早熟型モデルと晩成型モデル～』，2016年１月

（解説）

・日本放送協会『ウインブルドン2015』，2015年６月

・日本放送協会『上海オープン2015』，2015年10月

・日本放送協会『全豪オープン2016』，2016年１月

・日本放送協会『マイアミオープン2016』，2016年３月

（役職）

・三田体育会副理事

・慶應義塾体育会庭球部監督

・慶應チャレンジャー国際テニストーナメント（慶應義塾主催）トーナメントディレクター

・公益財団法人日本プロテニス協会　常務理事

・公益財団法人日本テニス協会　情報科学委員

・公益財団法人日本オリンピック委員会　強化スタッフ

研究助成等

・“下肢および足部への加重負荷からみた各種スポーツの動作特性～安全なスポーツ実施を目指して～（研究代表者：佐々木玲子)”，学事振興資金（共同研究），123万円

永田　直也【助教（有期）】

著書・論文・執筆・報告書

（論文）

・近藤明彦・加藤大仁・佐々木玲子・永田直也・山内賢，“体育授業における個人種目と集団種目の違いと授業前後におけるモチベーションの変化について”，慶應義塾大学体育研究所紀要，55：25-27，2016.

学会発表等

・Naoya Nagata, Ken Yamauchi, Reiko Sasaki, Hirohito Kato, Akihiko Kondo, “Influences of Different Sport Types on Student Motivation in College Physical Education Classes”, ISSP 50th ANNIVERSARY INTERNATIONAL SEMINAR “A Bridge From the Past to the Future”, Roma, 19-20, April 2015

・永田直也・近藤明彦，“学生が見た授業時に「教師が果たす機能」について”，日本スポーツ心理学会，福岡，2015年11月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講師）

・“メンタルトレーニングセミナー”，NPO 法人目黒体育協会主催　平成27年度ジュニア育成地域推進事業，東京，2015年 5 月.

・公益財団法人東京都スポーツ文化事業団主催　平成26年度メンタルトレーニングセミナー，東京，2015年 9 月.

・世田谷区立三宿中学校　第 3 回家庭教育学級，東京，2015年11月.

・“スポーツ心理学”，公益社団法人東京都障害者スポーツ協会主催　平成27年度中級スポーツ指導員養成講習会，東京，2015年11月.

・“スポーツチームのメンタルトレーニング―チームのコミュニケーションを促進する―”，立川労働基準監督署主催　職場におけるメンタルヘルス・トレーニング研究会，東京，2016年 2 月.

（フィールドワーク）

・公益財団法人日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会　平成27年度障がい者競技スポーツ医・科学・情報サポート推進事業競技団体サポートスタッフ（心理）.

・独立行政法人日本スポーツ振興センター　マルチサポート事業（パラリンピック競技）外部協力者.

研究助成等

・“プリ・パフォーマンス・ルーティンにおける動作パターンと課題動作に関する研究”，文部科学省科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（若手研究（B））（15K16459），260万円

・“下肢および足部への加重負荷からみた各種スポーツの動作特性～安全なスポーツ実施を目指して～”，学事振興資金（共同），123万円，代表者：佐々木玲子.

当年中の研究教育活動の概要

当年は、体育研究所での研究教育活動 4 年目であった.

研究活動では、「プリ・パフォーマンス・ルーティン（PPR）」をテーマにした研究に対し、文部科学省の科学研究費助成金を獲得した。得た資金を有効に活用し、これまでの予備測定で得た結果とともに新たな課題に対応した測定を実施した。また、基盤研究コアテーマ①「FD 実践としての体育授業プログラムの在り方」2 班の活動では、動機づけ雰囲気に関して、大学教養体育における教師の指導・関わり方について調査を行い、新たな尺度作成を行った。この研究結果は、資料論文を 1 編、国内学会発表を 1 件として報告し、知見の上積みを図った。これらの研究は、研究開始から複数年が経ち、一定度の結果が得られつつある。次年度は、助教（有期）の最終年度として、これまでの研究結果のまとめを行っていきたい。

教育活動では、4 年目ということもあり、多くの面でこれまでの経験を活用した取り組みをすることができた。また、HAPP や「オトナのスポーツテスト」などのスポーツイベントにも主体的に関わり、塾生のみならず地域社会に対するスポーツ教育・普及活動を行った。2020年の東京オリンピック・パラリンピックに関連し、日吉キャンパスがイギリス代表チームの事前キャンプ地となった。次年度は、この企画を狙い、塾生へのオリンピック・パラリンピック教育を行っていきたい。

福士　徳文【助教（有期）】

著書・論文・執筆・報告書

（論文）

・Yu Shimasaki, Masashi Nagao, Takayuki Miyamori, yukihiro Aoba, Norifumi Fukushi, Yoshitomo Saita, Hiroshi Ikeda, Sung-Gon Kim, Masahiko Nozawa, Kazuo Kaneko, Masafumi Yoshimura, “Evaluating the Risk of a Fifth Metatarsal Stress Fracture by Measuring Serum 25-Hydroxyvitamin D Levels”, Foot and Ankle International, 2015.11

・福士徳文，吉村雅文，須田芳正，青葉幸洋，石原美彦，井口祐貴，“足趾把持筋力と第５中足骨疲労骨折の関係の検討：シーズンの期分けに着目して”，慶應義塾大学体育研究所紀要，第55巻第１号，2016.1

学会発表等

・福士徳文，河村剛光，吉村雅文，須田芳正，石原美彦，“大学サッカーチームにおける体力測定の実態”，第28回日本トレーニング科学会大会（鹿屋体育大学・鹿児島），2015.11

・福士徳文，村山光義，石手靖，植田史生，須田芳正，“スポーツ競技団体の医科学サポートに関する現状”，第19回日本レーザー・スポーツ医科学学会学術集会（持田製薬株式会社・東京），2015.12

・村山光義，石手靖，植田史生，須田芳正，福士徳文，“スポーツ科学分野の LLLT 研究トピック2015”，第19回日本レーザー・スポーツ医科学学会学術集会，（持田製薬株式会社・東京），2015.12

・河村剛光，石原美彦，井口祐貴，青葉幸洋，中田学，福士徳文，“大学女子ソフトボール選手における視線行動の測定評価～打者および内野手の視線～” 日本体育測定評価学会第15回大会（二松学舎大学・東京），2016.2

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講演）

・福士徳文，“慶應義塾通信教育課程大阪慶友会講演 「慶應義塾大学体育会ソッカー部の現在～サッカーの起源・歴史を振り返りながら～」”，慶應大阪シティキャンパス，平成27年10月18日

（講師）

・武蔵野大学教養教育部「健康体育２　スキー実習」非常勤講師，長野県志賀高原スキー場，平成28年２月８日～２月12日

・順天堂大学医療看護学部「野外スポーツ実習（スキー）」非常勤講師，山形県蔵王温泉スキー場，平成28年２月23日～２月27日

（役職）

・公益社団法人全国大学体育連合総務部委員

・慶應義塾大学体育会ソッカー部コーチ

研究助成等

・“下肢および足部への荷重負荷からみた各種スポーツの動作特性～安全なスポーツ実施を目指して～（研究代表者：佐々木玲子）” 学事振興資金（共同研究），123万円

当年中の研究教育活動の概要

当年の研究活動は、予てよりテーマにしているサッカー選手の傷害予防（第５中足骨疲労骨折）に向けた研究として、足趾把持筋力との関係について検討し、体育研究所紀要にまとめた。また、新たにサッカー選手の体力テストに関する研究に着手し、研究を進めた。

2．所内定例研究会発表会要旨

第１回　４月14日

村山　光義

筋硬度押圧式筋硬度計とREAL TIME ELASTOGRAPHYによる安静時上腕二頭筋の筋硬度の比較

近年、超音波診断装置を用いて組織の弾性特性を計測するelastography法[1)]が普及してきた。この方法は、組織に微細な変形を与えた際のひずみを超音波画像から判別するものであり、組織の硬さ情報として用いられるようになってきた。筆者らは従来から押圧型筋硬度計測により、筋の機械特性や循環変化を推測することを行ってきた[2)]。しかしながら、elastography法と押圧法の厳密な比較はなされていない。そこで、本研究は安静時の上腕二頭筋おいて２つの方法による筋硬度評価を行い比較検討した。

押圧式筋硬度計はTK-HS100（特殊計測）を可動ステージで制御する筆者らの計測システム（TK）を用いた。elastography法は、Real-time Tissue Elastrography（RTE）：Prosound F75（Hitachi Aloka Medical）を用いた。被験者は21名の成人男性、上腕二頭筋上に３点の計測点を設定し、両腕について安静仰臥位で計測を行った。

筋厚の40%から算出した押し込み筋硬度（E40%）とRTEから算出したひずみ率（Strain Ratio：SR）には有意な相関関係が示されたが、決定係数は中程度であった（$r = -0.64$, $R^2 = 0.40$, $P < 0.001$）。また両者の関係は曲線的であり、他の回帰分析でも相関係数は−0.64以下であった。以上から、TKとRTEの値の一致度は低く、それぞれの計測値は別の特性を持つものと考えられる。

備考（参考文献・その他）

１）Chino et al.（2013）PLoS One 7 : e45764.
２）Murayama et al.（2000）Eur J Appl Physiol 82 : 361-7

本研究はJSPS科研費25350822の助成を受けて行われたものであり、2015年６月のヨーロッパ・スポーツ科学会議にて発表予定である。

第１回　４月14日

福士　徳文

足趾把持筋力と第５中足骨疲労骨折の関係の検討　～シーズンの期分けに着目して～

【目的】人工芝グラウンドでのスポーツ活動の機会が増加したことで、傷害発生状況に変化がみられていることが問題視されている。そのため、これまでに人工芝そのものやシューズ等の道具の改良は進められてきたが、実際の身体つくりや動きつくりに関しては十分な検討が行われていない。そこで本研究では、人工芝上でのスポーツ活動における傷害発生予防を目的としたトレーニング立案に向けた調査の一貫として、足部を中心とした身体機能特性の調査を行うことを目的とする。傷害予防に重要な要素である足趾把持筋力を調査することは、比較的簡便に調査を行えることも鑑みると、選手や指導者にとって非常に有益な情報となり、今後の方向性を見出す上でも重要性が高いと言える。

【方法】大学サッカー選手を対象に、足趾把持筋力（足指筋力測定器：竹井機器工業社製）、身体組成（InBody：バイオスペース社製，体組成計インナースキャン：タニタ社製）の測定を行う。足趾把持筋力および身体組成に関して、オフシーズン（① 7/30，⑥ 1/8，⑦ 2/3）、プレシーズン（② 9/1）、インシーズン（③10/9，④11/6，⑤12/4）の各シーズンで測定を行った。

【結果】結果Ⅰ：非受傷群（23名46足）のシーズンごとの体重比足趾把持筋力を比較したところ、②と④⑤⑥（②：0.39±0.07，④：0.42±0.07，⑤：0.44±0.07，⑥：0.44±0.07）、⑤と⑥の間で有意差がみられた（$p < 0.05$）。結果Ⅱ：非受傷群と受傷群（３名３足）の体重

比足趾把持筋力の比較をしたところ、統計的な有意差はみられなかったが、受傷群の筋力が低い傾向がみられた（非受傷群：0.42±0.07，受傷群：0.39±0.05，p＝0.07）。結果Ⅲ：受傷群の受傷足と非受傷足の体重比足趾把持筋力の比較では、受傷足の筋力が有意に低かった（受傷足：0.39±0.05，非受傷足：0.45±0.06，p＜0.01）。結果Ⅳ：非受傷群の体重比足趾把持筋力の右足・左足の比較では、どのシーズンにおいても有意差はみられなかった。

【考察】結果Ⅱは、藤高ら（2011）の研究を支持する結果となったが、結果Ⅰにおいてシーズン間での有意差がみられたため、受傷者の特徴を見出すためには引き続き定期的なデータを蓄積する必要があると考えられる。第5中足骨疲労骨折は再骨折のリスクが高い傷害であるため、結果Ⅲ・Ⅳでみられたような受傷足と非受傷足の筋力差は、手術後完治した状態であっても、トレーニングや十分なケアを行っていく必要がある。

第2回　5月12日

佐々木玲子

観察的評価からみた幼児の基本的動作の習得度および評価の有効性の検討

幼児期は様々な動作を獲得し習熟していく時期である。基本的な運動能力については、一定の測定方法に基づいた量的な指標によって評価し把握することが一般的である。しかしながら、幼児においては課題動作の遂行によって得られる測定値のみでは動きの習熟度等を十分に捉えることは難しく、どのように動いているかを観察的に評価することも必要だと考えられる。本研究では、幼児の基本的な動作について、観察的方法による評価を行い、幼児期の発達的特徴を示し、適した評価方法について検討することを目的とした。

対象は4－6歳の幼児であり、走跳投など基本的動作の習熟度を測定・評価した。観察による（質的）評価は阿江ら（2009）によって提案された評価項目を用いて行った。

本研究で対象とした基本的な動作は、動き方全体、あるいは動きの構成要素の面からみて幼児期に向上的に変容することが示された。また、観察的評価は幼児の動作評価にあたってある程度有効であり、特に全体的な動きの印象を評価することが量的指標のみでは不十分な幼児期には有用であると考えられる。なお、観点ごとの達成率の結果から、幼児により適した動作の評価観点をさらに検討する必要性が示唆された。

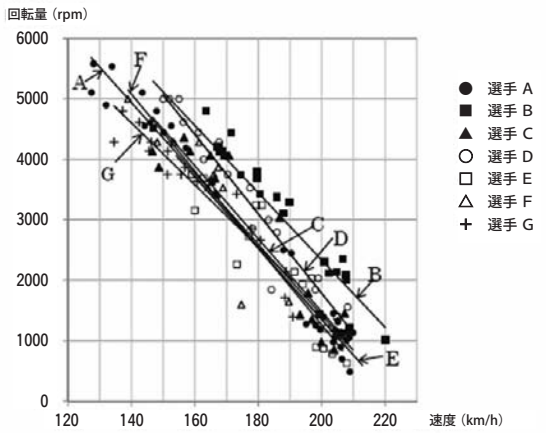
本研究は、平成22～24年度科学研究費（課題番号 22500528）の助成を受けた研究の一部である。

第2回　5月12日

村松　憲

世界トップクラステニス選手のサービスにおける速度と回転量の関係について

テニスにおいては、ボールの速度と回転が戦術的に重要な意味を持つため、この両者について理解することが競技力向上において大変有用であると考えられる。これまでこの両者を計測・報告した研究は発表者の知る限り全く無い。そこで本研究は、世界ランキング50位以内の男子選手7名について、国際大会試合中のサービスの速度と回転量について調



査し、その関係について考察した。

ボール速度についてはHawk-Eye社から提供を受け、回転量については村松ほか（2010）の方法に従って高速度カメラで計測を行った。その結果、ボール速度と回転量の間には図のような関係が得られた。全選手の全データをまとめると、「回転量（rpm）＝（－56.4）×速度（km/h）＋12954」という関係が得られた。また速度と回転量の関係に選手間の違いや1stサービスと2ndサービスの有意な違いは見られなかった。本研究の結果を活用することで、トップを目指す選手のサービス速度、回転量の具体的目標が得られると考えられる。

第3回　6月16日

加藤　大仁

スポーツは手段に過ぎないのか？ 近年のスポーツ政策に関する一考察

これまでの研究会発表では、スポーツ立国論が東京都によるオリンピック招致を背景に、スポーツ基本法という形に収斂していったことを再三報告してきた。スポーツ立国が唱えられたのは第1次安倍政権の時代であるが、それ以前の政権、とりわけ小泉政権時代に展開された新自由主義的な経済政策に鑑みれば、スポーツの振興も民間に任せるべきであるとの方向に議論が進む可能性もあったはずである。

しかし、スポーツ基本法では、トップスポーツの競技力向上や、国際競技会の招致・開催の支援などが、国の義務とされたのである。そのため、2020年に向けた招致活動の際、国による財政保証がスムーズに得られるなど、東京へのオリンピック招致に関しても、一定の効果があったといえるだろう。その一方で、国立競技場の建設費を巡る舛添都知事と下村博文文部科学大臣の鍔迫り合いや、バスケットボールやバドミントンをはじめとする競技会場の変更など、東京オリンピックに関する話題は今後も暫くの間はテレビや新聞、インターネットといったメディア空間を賑わしそうである。

ところで、昨年の発表では何故東京都がオリンピック招致を目指したかについては、殆ど言及することができなかった。そこで、今回の発表では、オリンピック招致に関する文書をトレースし、都市問題の解決策としてのオリンピックという側面に光を当てたいと思う。

2020年に向けた招致活動では、震災からの復興が大々的に掲げられたが、招致活動を始めた時点まで遡ると、オリンピックを契機に東京の再生、ひいては日本の再生を図ること、国際的な都市間競争に勝ち抜くことが一義的な目的とされたのである。

とりわけ国際的な都市間競争に勝ち抜くには、様々なインフラ整備が必要となる。そして、いまや「2020年の東京オリンピックまでに」を合言葉に、様々な事業が進められているのである。

このようにみると、東京オリンピックというイベントを準備する過程で、スポーツそのものの重要性は、極めて低いのではないかとの疑問が浮かんでくる。また、人々のニーズがスポーツに親しめる環境づくりにあるということを考えれば（『朝日新聞』2011年12月20日朝刊）、昨今のスポーツ政策は再考の余地があると言えよう。

そもそもオリンピックのような一過性のイベントに依存するだけでは、スポーツの振興など有り得ない（尾崎 2012、加藤 2014）。2020年のオリンピックを契機に経済の活性化を図り、史上最多のメダル獲得を目指すのが政治の役割であるなら、人々がスポーツという文化を日常的に享受できるような環境を整備するのも政治の役割であろう（加藤 2014）。

備考（参考文献・その他）

尾崎正峰（2012）　日常生活圏からスポーツイベントを考える．都市問題　vol.103

加藤大仁（2014）　手段としてのスポーツ、目的としてのスポーツ：近年のスポーツ政策に関する一考察．海外外事情　62（11）

第３回　６月16日

鳥海　崇

ボールゲームにおけるゲーム分析を用いた実践的研究

本塾体育会の早慶戦の結果は18勝42敗３分で勝率が約３割であった。そのうち勝ち負けを問わず僅差の試合は約20試合（約３割）であった。一昔の早慶戦とは異なり、近年の早慶戦は多くの競技で白熱するようになっている。このような白熱した僅差の試合を勝利に導くために「あと１歩を埋める科学アプローチ」が必要となる。

「あと１歩を埋める科学アプローチ」として以下の３テーマについて研究を進めている。

・体力及び体組成測定を用いたタレント識別に関する研究
・マウスガードを用いたパフォーマンス研究についての実践的研究
・ボールゲームにおけるゲーム分析を用いた実践的研究

本発表では上記３．についての研究報告を行った。

今回は試験的調査として体育会水泳部水球部門を対象として映像を用いたゲーム分析が与える影響について調べた。ゲーム分析ソフトとしてSportstec社のGame Breakerを用いた。これは試合中の選手のプレイ内容（シュート、ファウル等）をパソコン上で入力することで、選手が選択したプレイ内容の映像をダイジェストとして抽出することができるものである。従来の早送りや巻き戻しで見たいシーンを探し出す必要がなく、格段の効果が期待できる。このソフトと専属アナリストを配置して１シーズンを通じて映像サポートすることで、全シーズンとの競技成績を比較した。

結果としては、春のリーグ戦のみ順位が１つ上がったものの、秋のリーグ戦、早慶戦、日本選手権予選、大学選手権といずれも昨シーズンと同じ競技成績（順位、点差）であり、本サポートの導入前後において競技成績の明確な変化は見られなかった。

選手、コーチからの聞き取り調査によると映像によるフィードバックは好評であった一方、専属アナリストからは作業量が膨大であり、また一人での作業が中心となるためサポートの実感が得られないといった問題点が指摘された。また水球競技において僅差といわれる３点差以内の試合は年間18試合中、それぞれ３試合ずつあり、その勝敗は導入前シーズンが２勝１敗であったのに対し、導入後シーズンは１勝２敗であり、映像分析による試合結果への効果は見られなかった。

今後の課題としては映像サポートが学生スポーツの競技力向上にどの程度寄与するかの調査が必要であると考えられる。時間、人材、予算が限られている多くの学生スポーツにおいて、映像サポートの費用対効果を明らかにすることで、その効用が現実的なものになると考えられる。

第４回　７月７日

板垣　悦子

ピラティスエクササイズ効果の可能性を探る①

ピラティスエクササイズは歴史が浅く日本での普及もごく最近である。ピラティスの成り立ちと日本へ普及された経緯、具体的にはどのようなエクササイズなのか等の説明と併せて、効果検証論文を検索し、内容を整理したものを説明した。論文整理の目的は授業時学生に記入してもらっているジャーナル（振り返り日記）からピラティスの効果を探る基礎資料とするためである。

ピラティス効果に関連する検索論文はバランス・関節稼動範囲・運動強度、血管系応答・

精神面、筋力、筋厚、筋動変化に関するもの
であった。

著者(発行年)	掲載誌名	対象者(人数・年齢・性別	介入期間	介入内容(期間・時間含む)	アウトカム指標	結果概要
Kim Emery,Sophie J. De Serres,Ann McMillan,Julie N. Cote,2009	Clinical Biomechanics 25(2010)124-130	健康な男19人(介入群10名、平均年齢33.1歳、コントロール群9名、平均年齢28.6歳)	12週間	1時間のピラティストレーニングを週2回×12週	座位姿勢の変化、腹筋の強度、肩の可動域・最大屈曲を6台のカメラを使用しカメラ分析システムを使用し測定する。	12週間のピラティストレーニングの結果、肩の可動範囲が広がり、また体幹筋肉、姿勢に効果かあることがわかった
Duncan J.Critchley,Zoe Pierson,Gemma Battersby,2010	Manual Therapy 16(2011)183-189	ピラティス経験が無く、体に痛みが無い健康クラブの会員34人(男性8名、女性が26名)筋トレ群16名、平均年齢30歳(男4名、女12名)、ピラティス群18名、平均年齢31歳(男4名、女性14名)	8週間	非監督下において、ピラティスマットトレーニング(imprint training /ハンドレッズ)、筋肉強化トレーニングを週に2回×8週間	腹横筋と腹斜筋の厚さを実験前と実験後に超音波を用いて測る。	ピラティストレーニング参加者はハンドレッズにおいて腹横筋(TrA)の厚さが肥大したが、筋肉強化トレーニング群に参加した人たちは、それよりも肥大した。腹斜筋は両群とも減少した。

著者(発行年)	掲載誌名	対象者(人数・年齢・性別	実施場所(監視下か否か)	介入期間	介入内容(期間・時間含む)	アウトカム指標	結果概要
JU HYUN.KAK HWANGBO,CHAE-WOO LEE,2013	Journal of Physical Therapy Science 2014;26(2)291-293	65歳以上の女性40人		12週間	ピラティスマット運動(PME)あるいはan unstable support surface exercise40分×3日/週を12週間	被験者のバランス能力の向上を確認するために、1分間身体の揺れの長さと足裏の中心の圧力の速度を測定、動的バランスの向上を確認するためにthe Timed Up and Goテストを実施した。	PME,USSE両方のグループで揺れの長さ、速度は大きく減少した。揺れの長さにおいて両者を比較すると、PMEグループはUSSEより遥かに大きく減少していた。実験からこの2つの運動は身体のバランス感覚の向上に大きく寄与するものであることを確認した。
大熊玲子,2012	Research Journal of JAPEW27:55-63. 2011	体育授業参加者26名4回以上出席者/全6回(男性5名・女性21名・平均年齢20歳標準偏差2)	大学体育施設(体育館)	6週間	体育教員によるピラティス授業1回/週,90分/回,全6回授業	アンケート調査による学生の意識分析と観察	学生の心身の緊張緩和に一定の効果がみられ、7割の学生が日常生活において心身の状態を把握し自らコントロールしていく重要性習慣の形成に役立つと考える。

著者(発行年)	掲載誌名	対象者(人数・年齢・性別	介入期間	介入内容(期間・時間含む)	アウトカム指標	結果概要
CHAE-WOO LEE,JU HYUN,SEONG GIL KIM,2013	Journal of Physical Therapy Science 2014;26(4):475-477	KスポーツセンターとHスポーツセンターに通う腰痛持ちのビジネスウーマン40人平均年齢PME(ピラティスマット運動)32歳PAE(ピラティス器具)34.4歳	8週間	ピラティスマット運動(PME)あるいはピラティス器具を使った運動(PAE)50分×3日/週を8週間	被験者のバランス能力の向上を確認するために、彼らを目を開いた状態で30秒間壁の前で立たせ、身体の揺れの長さとその速度を測定した	どちらも腰痛とバランス能力の改善が見られたが、PME群はPAEに比べて、被験者の腰痛とバランスを大きく改善した。それはPAE群が重い器具を使用した運動であるのに対し、PMS群が自ら体幹部分の筋力を高める運動であるため負荷の違いによるものと思われた。
YONGNAM PARK,YOOUNGSOOK BAE,2014	Journal of Physical Therapy Science 2014;26(8):1157-1160	脊柱湾曲度が10°以上の20代から30代の男女31人(介入群19名、コントロール群12名)	8週間	ピラティスの運動システムに基づいた運動療法60分×3日/週を8週間	脊柱湾曲の度合い、見かけの脚の長さのボー致、顎関節の可動範囲と偏差を測定し、比較した。	介入した被験者は脊椎湾曲の程度は著しく低下し顎関節の可動範囲が広くなり、その偏差は大きく変化がみられた。軽い脊柱湾曲症が顎関節の可動範囲を減少させる要因であることがわかった。
Patrick J. Culliganなど7名,2009	Presented at the 29th annual Scientific Meeting of the American Urogynecologic Society,Chicago 2008	骨盤底にほぼ、あるいは全く問題が無い女性62人(理学療法32名、ピラティス30名)	24週間	理学療法士あるいはピラティス講師のもとで週に1時間のピラティストレーニング×24週	perineometry(cmH2O)を用いた強度の測定.	両グループともperineometryは向上した。両者において顕著な違いは見受けられなかった。

第４回　７月７日

山内　賢

ウェアラブルカメラの映像とハンディカムを組み合わせた動作観察の有効性について

「目の前の現象は100%正しいのか？　見えているものは氷山の一角なのかもしれない。」を提言して、個人が正しいと認知したものに個人差がある場合は同じものでも異なる解釈をしてしまう反転図形、シルエット錯視の例を解説した。直感後に情報の補問が行われ、よく考えて凝視しているうちに異なる解釈になる錯視感覚は、その確率に過去の経験や思い込みが関与していると考えられているので、錯視感覚を最小限に抑える対策としては、正誤や相違を追究する２画面の映像を比べることが有効であると予測できる。企業市場では、作業能率アップをねらいとした、熟練者と非熟練者の動作を比較する二画面映像の教育（学習）用製品が開発されている。いわゆる企業現場における社員の技能を高めるためのトレーニングにICTの活用が導入されはじめている。見て活動して学習する機会が多い体育・スポーツにおいては、錯視感覚削減を目的としたICTを用いる教材の開発はまだまだ充実していない。近年、ウェアラブル端末は、多くのメーカーが開発・マーケットをひろげている。Bluetooth接続のシステムはマートフォンやタブレットと連動できるので、様々な通信情報を手軽に記録・保存することを可能にしている。名前の通りウェアラブルなので、端末の活用は、「身体部分装着のマルチ化、軽量化、コンパクト化、捜査の簡便化」をデザインすることによって、装着していても「身体活動の自然なフォームや両手を自由に使える」利点がある。撮影機能付きのウェアラブル端末は、頭部、四肢、体幹の装着方法を工夫することにより、定位置カメラで撮影していたときにおこる死角をカバーして、錯視を予防することができる利便性がある。運動動作学習におけるフォーム改善の指導には、注視したい部分とフォーム全体の関連を映像で確認しながら、正しい動作を模擬学習する方法が効果的と考えられるので、このたび高齢者がポールウォーキングを学習する場合における、２画面映像教材の作成を試みた。本調査は、映像教材作成にあたり、どのようなフレーミングが教材視聴者に対して理解しやすいかを判定することである。本調査により判明した有効な映像教材の意匠の流用は、自主開発した二画面同時視聴ソフトと併用することにより、運動指導や学習者の運動協調性に貢献することの期待が予見できる。

第５回　10月13日

須田　芳正

大学サッカーの育成について

ドイツブンデスリーグのマインツで活躍している武藤選手の大学時代のDVDを見ながらプレー分析や大学サッカーの役割について発表を行った。

１．武藤選手のプレー分析
- バイタルエリアからのミドルシュート
- ドリブル突破
- クロスからのシュート

２．大学サッカーの役割
- 人間力の向上
- 最後の育成
- チームの中での役割
- 体育会ソッカー部の現状

第６回　11月10日

北出　真里

（順天堂大学・女性アスリート外来）

１．女性スポーツセンターの概説

女性アスリートが健康で長期的に高い競技力を継続できるよう医学的側面から総合的に支援することが目的で、臨床・研究を行っている。国際サッカー連盟（FIFA）から、FIFAメディカルセンターに認定され、サッカー選

手の障害予防や、選手の健康を増進するための、医療の提供、健康増進の実践、教育・育成にも力を入れている。

２．女性アスリートの３主徴について

トレーニングの量や質が高まったにも関わらず、バランスの良い食事を取らなかったり、月経がきたりこなかったり、または完全に止まっていたり、疲労骨折や靭帯の損傷、怪我の治りが悪い、などをそのままにしていると、①「利用できるエネルギーの不足」、②「視床下部性の無月経」、③「骨粗鬆症」へとつながり、トレーニングの成果を発揮できないばかりか、アスリートとしてのキャリアを続けることが困難になることもある。このような、女性アスリートが陥りやすい３つの障害を、Female Athlete Triad（女性アスリートの３主徴）という。女性アスリート外来ができて１年の間に約150人が受診し、その約８割が無月経か生理不順の症状を抱えていたという。

３．質疑応答

発表後の討議では、活発な意見交換がなされた。

第７回　12月８日

坂井　利彰

世界男子プロテニスツアーにおける早熟型と晩成型の育成モデル

◆スポーツにおいて長期目標（世界ランキング100位にランクインなど）を定めて達成するためには短期目標の達成の積み重ねが有効であるといわれているが、日本テニス協会が実施する強化指針では具体的な目標達成ステップは定められておらず、世界的にもそのような例はみられない。テニスは対人スポーツであり、タイムや距離などの記録を伸ばしていくスポーツよりも、長期目標を見据えた具体的な短期目標を設定しにくいという実情がある。

◆スポーツのパフォーマンスと年齢の関係についての研究は、年齢と適正な練習内容の関係や、加齢による身体能力の低下などというように特定の年齢時について検討するものが多く、選手キャリアの形成を目的とした各年齢時を統括的な視点で俯瞰する研究はこれまでに行われていない

◆世界男子テニスに関する研究において、世界ランキング100位にランクインした年齢との選手の生涯最高ランキングが強く正の相関を示すこと、その要因としてATPツアーの構造が10代で100位にランクインした“早熟”な選手に有利に働いていることを明らかにした。

◆その結果は同時に、10代のランキングや出場大会が後の選手キャリアを決定付けている可能性を示唆している。つまり、各年齢時の短期目標を設定し達成していくという過程は、選手のパフォーマンスを向上させるという目標達成理論における役割だけでなく、ATPツアーの構造に長期目標の達成を阻まれないためにも不可欠であると考えられる。

◆世界ランキングだけでなく選手の成長過程などの指標を活用した研究の内容を多角的に考察した上で、研究実践として運営している慶應チャレンジャー国際テニストーナメントの活動を紹介。2020年の東京五輪以降は日本国内から数多くの晩成型選手が輩出されるための育成プランを『SAKAI METHOD』として提唱していきたい。

第７回　12月８日

永田　直也

運動物体の追跡と注意の関連に関する研究

本発表では、ボールゲーム熟練者が運動物体を追跡する際に影響を与える実験環境について検討した内容を報告した。実験では、運動する物体と注視点との距離、複数の運動する物体が作る面積の２つの要因と追跡の難易度の関係を検討した。実験の結果、運動する物体が中心視野から離れた場合、運動物体が

作った面積が広がった場合に追跡する難易度が高まることが示された。

発表後の討議では、視野の個人差にどう対応するか、観測者の頭部の運動を考慮するなど実環境へどう近づけていくか等の質問があり、基礎的研究から応用的研究まで広がりを持つ内容となった。

第８回　１月12日

近藤　明彦

ドイツの教育システム

平成28年４月より１年間ドイツ・ケルン大学の交換研究員として渡独が決まりました。そこでドイツの研究スタイルおよび教育システムについて紹介をします。

アメリカにおけるスポーツ科学の時代のニーズに合わせた先進的な取り組みに比べ、ヨーロッパなのスポーツ科学は少々保守的であるとか理論中心であるとかのイメージをいだくことが多いかと思われます。ヨーロッパの教育システムはボローニャ・プロセスを経てアメリカと同じバチェラー、マスターも取得出来るようになりましたがまだ旧来のシステムを残しているところも多々あります。

教育システムの違いなどが研究の質や動向に深く影響を与えているのでは無いかというイメージがあります。今回は

１．ドイツの大学の入学システム、学位のシステムについて
　Universitaet と Hochshule、Diplom と Doctor-Arbeit
２．ドイツの教員人事のシステムについて
　Professor と Dozent、Angeshutelter

等について概覧した。

第８回　１月12日

吉田　泰将

剣道における礼法のとらえ方

平成24年度から全国約11000校の中学校の１・２年生の男女が、保健体育の授業で「武道」を必修として学ぶようになった。これは、文部科学省が平成18年に行った「教育基本法」の改正で、「伝統文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」と示したことを受けている。

したがって、風土と歴史と切り離せないものであり、今回取り上げた「剣道における礼法」も、日本の歴史と剣道の歴史の中で、醸成されたものと考える。

武道の中の剣道は、対人性を大きな特徴とする種目で、惻隠の情などの相手を思いやる心を含めた指導が重要となる。剣道は、礼をする意味を理解させ、心から発する礼を身に着けることを指導していく。その意味には、相手を尊重する、敬意を払う、相手の目を見て心を読む、失礼をしない、詫びる、相手を讃えるなど多くが含まれる。

剣道の授業で身に着けた礼法が、武道場や体育館を出てからも実践できるようになり、社会の中での人々との関わりの中で大切な絆を作り上げることに貢献できたら幸いである。

今後も中学校の教員を指導し、より良い剣道授業の展開がなされていくことに貢献していきたい。

第８回　１月12日

奥山　靜代

体育実技履修者における身体活動量に関する研究

＜目的＞

体育実技履修学生を対象に日常生活における身体活動量、体力を測定し、１）大学における体育・スポーツ指導のための基礎資料を得ること、２）若年期からの継続的かつ規則的に一定の運動量を確保するように意識を高める　など、より良い生活習慣を身に付ける一助とすることを目的とした。

＜方法＞

対象は「エアロビクス」および「健康科学」（芝共立）の授業を履修した学生男子26名、女子102名、計128名であった。身体活動量の測定は、生活習慣記録機（Lifecoder, Suzuken）を腰部に起床してから就寝するまで７日間装着した。ライフコーダに記録されたデータは転送プログラムを介してコンピューターへ取り込み、その後解析した。調査時期は2012年、2013年の秋学期期間中の７日間であった。

＜結果およびまとめ＞

一週間の平均歩数は男女ともに10,000歩を越えており、H23年度国民健康・栄養調査（厚生労働省）の値と比較して高い値を示した。

・体育実技日（エアロビクス）、平日、休日に分けると、10,000歩を超えたのは体育実技日（男女とも）と平日（男子のみ）だけで、休日は10,000歩には達しなかった。
・休日と１週間平均の歩数を比較すると、１週間平均歩数は約1,800歩多く、体育実技を行った身体活動によって１週間平均歩数を増加させているとこと示された。

これらのことをまとめると、体育実技の時間が貴重な身体活動の機会となっていることは、以上の結果から明らかであるが、一週間平均で示した値は平日中心の身体活動量になるため、平日での学生生活を見直すことが必要であると考えられる。

３．全国大学体育連合指導者養成研修会参加報告

報 告 者：福士徳文
研修会名：第６回大学体育指導者養成研修会
期　　日：平成27年８月19日（水）～21日（金）
会　　場：立教大学池袋キャンパス

（１）研修プログラム
※講習Ⅰ，Ⅱ，Ⅲはクライミング、バレーボール、テニスの三種目に分かれて実施（報告者はクライミングを選択）

【第１日目】
①講習Ⅰ
②文部科学省特別講演
③特別講演

【第２日目】
①講習Ⅱ
②講習Ⅲ
③講義

【第３日目】
体験講習

（２）研修内容
①講習Ⅰ
講　師：水村信二（明治大学文学部）
　　西谷喜子（立教大学非常勤講師）

講習Ⅰでは、まず研修会の概要、目的および研修内容について説明を受けた。またクライミングのジャンルや、クライミングの設備・用具の説明、事故防止対策などを講義により学んだ。その後、ホールドのつかみ方、足の置き方などを確認し、クライミングの基本とされる、クライミングウォールに正対した姿勢で登るいくつかの基本ムーヴ（３点支持、立ち込み、対角線支持とスメアリング）の練習を行った。最終的には、指定された

ホールドのみを使用してゴールまで登るボルダリング課題に挑戦した。

②文部科学省特別講演

「コーチング・イノベーション推進事業について」

講　師：関　伸夫（文部科学省スポーツ・青少年局）

文部科学省特別講演では、文部科学省スポーツ・青少年局の関氏より、コーチング・イノベーション推進事業実施に至る経緯や具体的内容について学んだ。各取り組みは、文部科学省、日本体育協会、日本オリンピック委員会がそれぞれ主体となり実施している。中でも、「コーチング推進コンソーシアム」における『グッドコーチに向けた「7つの提言」』は我々スポーツに関わる人間にとっては参考とすべき内容であり、授業においても十分に活かすべき内容であろうことを再認識した。

③特別講演

「あるべき大学教員（指導者）像」

講　師：安西祐一郎（全国大学体育連合会長、日本学術振興会理事長）

特別講演では、全国大学体育連合会長および日本学術振興会理事長であり、前慶應義塾長でもある安西氏より、学生から「尊敬される」教員や指導者とはどのような人間であるのかについてお話をいただいた。認知・心理学の面から考えられる「あるべき像の基底因子」は①知識・技術、②コンピテンシー、③態度・人間性、の大きく3つに分けられる。当然ながら指導者自らがこれらの要素を満たしていなければ、主体性を持った学生を育てることはできないだろう。自身の現状と今後の課題について、よく考えさせられる内容であった。

④講習Ⅱ

講　師：水村信二（明治大学文学部）
　　西谷喜子（立教大学非常勤講師）

講習Ⅱでは、クライミングウォールに正対して登る基本ムーヴ（ハイステップ、手に足、ヒールフックなど）に加え、クライミングウォールに対して横向きになる「振り」と呼ばれるムーヴの練習を行った。基本ムーヴの練習後は、5種類の傾斜のクライミングウォールにそれぞれ設定された課題を完登できた課題数で順位を競う、コンペティション（個人戦）を行った。

⑤講習Ⅲ

講　師：水村信二（明治大学文学部）
　　西谷喜子（立教大学非常勤講師）

講習Ⅲでは、講習Ⅱで行った個人戦の成績を基に、1チーム4人、計4チームに編成し、団体戦を行った。各チームが1課題ずつ設定を行うが、その際にはどのチームも活発な議論がなされていた。本来個人スポーツであるクライミングも、授業を展開する工夫一つで、コミュニケーションスポーツとして活用できることを体験できた。

⑥講義

「映像を用いたオリンピック・パラリンピック教育」

講　師：舛本直文（首都大学東京大学教育センター教授、NPO法人日本オリンピック・アカデミー理事）

IOCは1912年ストックホルム大会からオリンピックの公式記録映画を作成しており、今回はベルリン大会の『オリンピア』を鑑賞した。その後、公式記録映画やその他オリンピック関連のドラマ映画では、「スポーツを通して心身ともに調和のとれた若者たちを育

成し、平和な社会の実現に寄与する」という、オリンピズムの理想を記録に留めていると紹介を受けた。2020年には東京大会の開催が決定しているが、スポーツに関わる私たちに、オリンピックを考え直すための良い材料を提供していただいた内容であった。

⑦体験講習

「Physical Education in English」

講　師：Kelly McGrath（明治大学・立教大学、非常勤講師）

グローバル化が進んでいる今日、体育の授業にも英語を導入する大学が増えてきている。体験講習では、実際に明治大学、立教大学にて英語で授業を行っているケリー氏の授業の紹介をしていただいた。体を動かすことだけではなく、自己紹介や他己紹介などの英語によるコミュニケーション、英語の聞き取りなどが盛り込まれていた。また、簡単な筋力トレーニングやストレッチ、エクササイズなどの紹介もいただき、体を動かした。英語もスポーツも単に知識として身につけるだけではなく、実践が重要な両者が合わさることで、より活発なコミュニケーションが生まれていたことを実感でき、とても有意義な講習となった。

4．浅野・所内・学事・小泉基金・未来先導基金報告書

①浅野均一記念研究奨励金

研 究 課 題

ボールゲーム熟練者の注意資源配分能力の検討

研究代表者　永田直也

補　助　額　208,000円

サッカーやバスケットボールといったボールゲームでは、ボール・味方・対戦相手等、空間内に存在する複数の運動物体を追跡し、その運動に対して様々な判断をする必要がある。従来の研究では、同時に複数の対象を心的に操作した場合、熟練者と非熟練者のパフォーマンスの優劣を注意資源仮説を用いて説明していた。しかし、この説明では、パフォーマンスの成否が対象者の注意を操作する能力によるか、これまでの競技経験から得た知識の影響によるか明らかでない。そこで、ボールゲーム熟練者の運動物体に対する注意資源配分能力の検討を進めることとした。その中で本研究は、注意配分に影響する提示条件を明らかにすること目的とし、対象者の能力を測ることが出来る条件設定の基礎資料を得ようとした。

実験参加者は、測定時に競技スポーツを行っていない一般・大学生10名であった。参加者の視力は、裸眼・矯正後で1.0以上あり、色覚異常がないことを参加者の申告で確認した。参加者は、画面の中心に視点を置いたまま画面上で間隔を変えながら移動する３対の円板を追跡し、対の円板のうち１つの間隔が一定度以上離れた場合にマウスをクリックする課題を実施した（図１）。実験条件は、画面上で対の円板が離れる位置を参加者の中心視野内（条件１・２・４）と中心視野外（条件３・５）とした条件、３対の円板が離れるタイミングを位相差120°（条件１・３・４・５）と180°（条件２）に設定した条件、対象円板の

移動方向を中心（条件４）とにとした。また、３対の円板を頂点とした三角形の面積は、条件１・２＜条件３・４＜条件５となった。参加者は、各条件を20試行行い、各条件の成否を比較した。

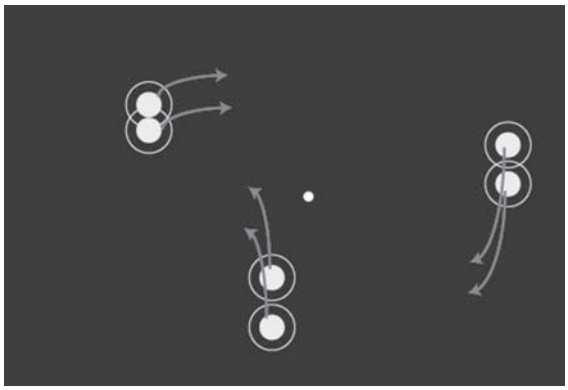


図１　呈示映像の例

実験の結果は、対応ある一要因分散分析を用いて比較した。分析の結果、条件１・２は、条件３・５よりも正答率が有意に高いことが明らかになった。この結果は、２つの要因から考えることが出来た。１つは、対象となる円板が中心視野内にある条件で正答率が高かったことから、参加者が物理的に円板の離れる様子を見やすかったことが影響したと考えられる。もう１つは、３対の円板を頂点とした三角形の面積が広くなると注意の配分や移動により多くの資源を使うため、正答率が低下すると考えられる。今回の実験では、これら２つの要因が実験参加者の注意配分に影響することがわかった。今後は、さらに注意配分に与える要因を洗い出し、熟練者の注意配分能力を明らかにできる実験条件を設定していく。

②所内個人研究費

研 究 課 題

現代日本における政治的潮流の変化とスポーツ政策の動向＃3

研究代表者　加藤大仁

補　助　額　284,300円

昨年度の研究会では、東京へのオリンピック招致が目指された背景として、オリンピックを奇貨とした都市の再生や経済停滞からの脱却、バブルの崩壊により頓挫した臨海地区開発といった目論見があったことを指摘した。実際、「2020年のオリンピックまでに」を合言葉に様々な事業が進められている。

ところで、2020年の夏季オリンピック大会開催地として東京が選ばれて以降、国立競技場建設費の乱高下や、エンブレムの盗用疑惑など、様々な不手際が社会的関心を集めてきた。周知のように、国立競技場、大会エンブレム共に当初の案は白紙撤回され、国立競技場は建設費の上限を1550億円としたうえで公募を行い、2015年12月に新たな案が決定。エンブレムも2016年４月に新たなデザインが採択された。しかし、国立競技場を巡っては、聖火台の設置場所が決まっていないなど、新たな問題が浮上している。

大会運営費や会場整備費等に関しても、2015年７月に、大会組織委員会の森喜朗会長が「全体の計画で当初の３倍くらい」と発言して以降、当初の計画案の甘さが指摘されている。因みに、遠藤利明五輪担当相は、2016年１月の衆議院予算委員会で、経費総額について「組織委員会も政府も把握していない」と答弁している。

国立競技場やエンブレム、大会経費を巡る問題からは、様々な決断を下すプロセスで、責任の所在がどこなのか、必ずしもはっきりしないという構造が浮かび上がってくる。このような無責任な体制は、河合隼雄によって「中空構造」と名付けられた体制そのものである。もちろん、中空構造そのものは、全否定されるべきものではない。

しかし、オリンピックのような事業の場合、政府が財政保証をしており、決定主体が全てのリスクを負う訳ではないので、混乱が生じやすい。建設会社やメディア関連の企

業、ホテルなど、オリンピックを通じて利益を獲得することが見込まれる業界も、リスクを負う必要性がない以上、計画段階では過小な見積もりを行うという誘因が働くことは否めない。我が国に限らず、これまでオリンピックでは経費の超過が常態化してきた所以である。

研 究 課 題
フィットネスウォーキングにおける運動処方を探る～反応時間と歩行能力～
研究代表者　山内　賢
補　助　額　762,912円

①【反応時間測定器の設計】

高齢者の自立した生活活動を可能にする条件は、筋力発揮に関連する動作の速さに加え、視覚・聴覚・触覚・平衡感覚等より得られる情報、および身体周辺の変化に対して、どれだけ早く認知して行動に移せるかという反射・反応能力（反応時間）が大きく影響すると考えられる。反応時間の測定は、外部からの刺激に対し、どれだけ早く動作を開始することができるかを評価するものであり、光刺激を介した測定が最も一般的である。しかし、高齢者の視力に機能低下がみられる場合は、測定条件の不都合により、他の受容器で測定する方法の必要性が求められる。その場合は、聴力、体性感覚等の身体機能を代用することが得策と考えられるので、光刺激に加えて音刺激と振動刺激を介する反応測定器の開発を試みた。市販されている反応測定器は、サイズが大きく重い機種が殆どで、測定器の運搬に利便性が感じられない。そこで、特別に設計した軽量な接続機器とノート型パーソナルコンピューター（PC）を連結するだけで計測できる携帯性に優れた反応時間測定器を意匠した。反応測定に必要な接続機器は、赤・緑・青の3色を発光するLEDボックス、Bluetooth対応ヘッドホン、振動を発生するバイブレータグリップ、光・音・振動の刺激制御するコントロールボックス、刺激に反応した時に押す赤・緑・青の3色のボタンおよびマットスイッチ等である。光刺激に関しては、反応した時に押すボタンが3色あるので、単純反応に加えて刺激とボタンの組み合わせによるダブルタスクの認識を評価できる。音刺激に関しては、パソコンで20から20000Hzの周波数をランダムもしくは意図的にコントロールできる。振動刺激は、視聴覚に障害がある者でも反応時間が測定できることを想定して設計している。測定結果は、光源・音源・振動刺激別にファイル管理ができる。

②【ポールウォーキングにおける運動強度と反応時間の関係について】

高齢者における身体機能の維持・改善は、運動習慣により可能である事例が、一般的に認められている。一過性の運動においても、適切な強度で運動をすれば、運動後の認知機能の改善が認められている。しかし、過度や低すぎる運動強度では、低下現象を示す研究報告も見受けられる（Hillman et al. 2004）。本研究は高齢者が平均6 km／分の速さでポールウォーキングを行った場合の運動強度と反応時間を事例的に調査した（7名，70.8±6.7歳）。以下に結果を示す。反応時間は有意に短縮した（$p < 0.05$）。運動強度は、安静時心拍数と210－（0.65×安静時心拍数）の予測式で算出した予測最高心拍数、および運動直後の心拍数より、カルボーネン法の計算式から換算した。反応時間には個人差が生じるので、反応時間の変化は短縮率を用いた。反応時間の動態は、中強度の有酸素運動直後に短縮、低強度あるいは高強度の運動直後にポジティブな影響がみられないことが報告されている（Kamijo et al. 2004）。運動強度と反応時間の関係は、U字型の現象が報告されているので、運動強度と反応時間の関係を2次方程式で近似した（$y = 0.0277x^2 - 2.6504x + 156.17$, $R = 0.85$）。2次方程式は極小値をも

つので、ポールウォーキングの運動強度に至適強度が存在する分析結果を示唆する。

【参考文献】

Hillman CH, Belopolsky AV, Snook EM, Kramer AF, McAuley E（2004）Physical activity and executive control：implications for increased cognitive health during older adulthood. Res Q Exerc Sport, 75（2）：176-85.

Kamijo K, Nishihira Y, Hatta A, Kaneda T, Wasaka T, Kida T, Kuroiwa K（2004）Differential influences of exercise intensity on information processing in the central nervous system. Eur J Appl Physiol, 92（3）：305-311.

本研究課題に関する発表

山内　賢　荻田　亮　柳川郁生　市河　勉　上野優子，ポールウォーキングによる歩行能力および健康関連体力維持・向上の可能性について，日本健康教育学会（2016）

研 究 課 題

体育実技履修者における身体活動量に関する研究

研究代表者　奥山靜代

補　助　額　320,448円

＜目的＞

近年、若年層の運動不足や生活習慣病が問題となっている。特に、身体活動の機会減少に伴う体力低下について、多くの指摘がされている。生涯体育・スポーツおよび生活習慣改善のためには、若年期から継続的かつ規則的に一定の運動量を確保することが重要である。したがって、若年層にある大学生に対して、健康への関心や体力の向上を促すことは生活習慣予防の第一歩として捉えることができる。そこで、学生を対象に日常生活における身体活動量、体力を測定し、これらをもとに、大学における体育・スポーツ指導のための基礎資料を得ること、および若年期からの継続的かつ規則的に一定の運動量を確保するように意識を高めるなど、より良い生活習慣を身に付一助とすることを目的とした。

＜方法＞

対象は「エアロビクス」および「健康科学」（芝共立）の授業を履修した学生男子26名、女子102名、計128名であった。身体活動量の測定は、対象者に24時間加速度センサを内蔵した生活習慣記録器（スズケン社製ライフコーダ）を腰部に起床してから就寝するまで７日間装着させる。データはデータ転送プログラムを介してコンピュータへ取り込み、歩行数、運動量（歩行、運動によるカロリー消費量）、総消費量（基礎代謝量、微小運動量、運動量を加算したもので、１日の総カロリー消費量）の測定データを求め、これらの値を体育実技日、平日（講義等の授業）、休日（土。日曜日の２日間）および１週間平均（７日間）に分類し、それぞれ平均値データとして用いることとする。調査時期は2012年、2013年の秋学期期間中の７日間であった。

＜結果およびまとめ＞

・一週間の平均歩数は男女ともに10,000歩を越えており、H23年度国民健康・栄養調査（厚生労働省）の値と比較して高い値を示した。
・体育実技日（エアロビクス）、平日、休日に分けると、10,000歩を超えたのは体育実技日（男女とも）と平日（男子のみ）だけで、休日は10,000歩には達しなかった。
・休日と１週間平均の歩数を比較すると、１週間平均歩数は約1,800歩多く、体育実技を行った身体活動によって１週間平均歩数を増加させているとこと示された。

これらのことをまとめると、体育実技の時間が貴重な身体活動の機会となっていることは、以上の結果から明らかであるが、一週間平均で示した値は平日中心の身体活動量になるため、平日での学生生活を見直すことが必

要であると考えられる。

本研究課題に関する発表

清水靜代、村岡慈歩、西田ますみ、大森芙美子、鈴木育夫、岡田知雄、佐々木玲子、加賀谷淳子：幼児期における調整力の発達と身体活動量との関係。慶應義塾大学体育研究所紀要　第45巻，1-6. 2006.

楠原慶子、大森芙美子、佐藤文、奥山（清水）靜代、佐々木玲子、鈴木明：短期大学女子学生の踵骨骨強度と筋厚、皮下脂肪厚、および体力的指標との関連。大学体育学　7巻13-24. 2010.

楠原慶子、奥山（清水）靜代、佐々木玲子：若年女性の体脂肪率増加を抑える至適身体活動量に関する研究。立教女学院短期大学紀要41：135-145，2010

③学事振興資金

研 究 課 題

下肢および足部への荷重負荷からみた各種スポーツの動作特性へ　～安全なスポーツ実施を目指して～

研究代表者　佐々木玲子

共同研究者　村山光義　永田直也
　　村松　憲　福士徳文
　　坂井利彰

補　助　額　1,230,000円

本研究は、各種スポーツを対象に、バイオメカニクス的手法を用いた測定によりそれらの動作特性を明らかにすることを目的としている。特に動作の主働部位である下肢を中心とし、運動中にかかる負荷およびその運動特性を客観的にとらえようとするものであり、そのためにフォースプレートを用いた地面反力測定と映像による３次元動作解析を手法とした実験を計画した。本研究は当初より複数年での実施を計画したものであり、平成27年度はその１年目として行った。まず、現存の機器の更新によって実験的研究実施の環境を整えることを中心とした。申請のフォースプレート用 AD 変換ユニットの増設により、運動時の床反力が測定可能となりそれを用いた実験に備えた。一方、対象とする種目および具体的な測定パラメータの選定に向けて、先行研究を参照し文献による検討を行った。また、以下の２つのスポーツ種目について動作分析を行った。①フライングディスクバックハンドスロー動作を対象に、映像分析による全身の動作パターンおよび踏み込み足の地面反力を測定し、異なる投球方法における両者の相違を検討した。投動作時の踏込のリズムの違いにより、ディスクの初速および軸足への負荷パターンが異なることが明らかになった。②バスケットボールフリースロー動作を対象に、シュート前の準備動作がシュート動作パフォーマンスに及ぼす影響について、映像分析から検討した。シュート動作における関節角度の推移をみると、準備動作によって動作パターンのバラツキが減少し、シュート動作の再現性を高めていることが示唆された。これらの結果は、次年度関連学会等において発表予定であり、準備を進めている。また当初の計画では、本年度中に大学生を対象としたデータの収集を予定していたが実施には至らず、次年度での実施を計画している。

次年度以降、具体的な各種スポーツ動作に着目してその特徴を明らかにするとともに、安全な実施に向けての指標を示すことにより体育・スポーツ活動場面に生かせるような提案をしていく予定である。

④小泉基金国外出張補助

研究代表者　山内　賢

補　助　額　328,000円

ポールウォーキング（PW）は、日本で行われているフィットネスウォーキングの一つです。その運動形態や効果は、スキーストックに類似した２本のシャフトを使ってウォーキングを行うものであり、単なるウォーキングよりも運動消費量を高めます。ただし、正

しい動作でPWが行われないとその効果は保障されません。そこで、正しいPW動作の学習に映像教材を用いることを考えました。映像学習は、定点カメラで運動動作の全身を撮影した教材を用いるのが一般的です。近年、身体一部や運動具に装着して撮影可能な小型で軽量なウェアラブルカメラが普及しています。今回の研究発表では、ウェアラブルカメラで撮影した斬新な映像学習の活用方法について報告しました。具体的には、PWの動作を前面および側面から撮影した定点カメラと、頭部に装着したウェアラブルカメラで撮影した腕振りの動画を組み合わせた映像学習教材の有効性を調査しました。映像の選択理由は、PWにおける正しい動作の指摘が、歩行姿勢と左右均等な腕振りにあるからです。調査は、以前、塾内の研究費で開発した2画面を同時再生できるPCソフトで視聴した映像に対する評価としました。評価のポイントは以下の事項における解り易さです。PWは、通常歩行の腕振りに合わせてシャフト操りながら、シャフトの着床を垂直にします。なお、シャフト先端は、振出し足の踵と同じ程度、身体より先行させます。踏み出し脚とシャフト着床の同調性は、PWの重要なテクニカルポイントのひとつです。また、腕振りが左右対称であれば、左右の歩幅の差が無くなり、身体の長軸回転やウォーキング動作をスムーズに最適化します。正しい腕振りはPWの「程よい上半身の前傾」、「摺足消滅」、「歩幅助長」、「歩隔調整（狭窄）」、「歩行速度向上」、「安定歩行」、「前方視野拡大」等の動作を誘発します。調査の結果、PWにおける歩行姿勢や腕振りのタイミングを矯正するために有効な学習教材は、ウェアラブルカメラによる映像、およびウェアラブルカメラと側面からの全身映像の組み合わせであることが判明した。

発表　山内賢：Assessing Fitness in Older Adults Using Wearable Cameras: Arm Swing Technique for Pole Walking. GSA2015, Annual Scientific Meeting PROGRAM BOOK 演題番号285, p 128,（Gerontological Society of America）

⑤未来先導基金

メンバー　植田史生　Jeff倉重（商学部）

◇タイトル（活動課題名）：剣道の国際交流およびハーバード大教育制度の体験プログラム

◇目的・背景：ハーバード大学には日本に関心を持っている学生が多くいる。その一人がJeff倉重君である。彼は、剣道を通して日本の歴史や文化を学び、日本に関心を持つようになった。塾生が、ハーバードの学生と剣道で交剣知愛の精神を教え、ハーバードの授業に参加しアメリカの教育制度と文化を経験し、アメリカの大学での「文武両道」（スコラー・アスリート）を自分で見て、経験して、勉強と運動の道を同時に成し遂げることを感じる機会が貴重な教訓になると考え、剣道を通して塾生とハーバード生の文化交流を行うことを目的としている。

◇活動内容・成果：11月18日17：00　Boston Logan Airport 到着　その後、ドミトリーとホテル組の2班に分かれ宿泊する19：00～23：00　Welcome Party。

19日 8：00～ 9：00 ハーバードの学生とともにAnnenberg食堂で朝食（20, 23）。 9 ：00～10：30 Harvard Campus Tour　10：30～12：00 Class（ミクロ経済学、科学の歴史）、昼食後、13：00～16：00 Class（アメリカの憲法、生化学、心理学、グローバル化されたアニメの文化、行動パターンの脳科学、日本美術史）の講義をそれぞれ選択して出席する。16：45～17：45 夕食　18：00～19：00 日本剣道形稽古　19：00～20：30 剣道合同稽古 21：30～23：30 Social with Students

20日 9 ：00～12：00 Class（化学と生化学の基礎知識、ユダヤ教の聖書、どうやって人間

が他の惑星で生活できるか、統計学入門、科学における数学方法論)、13：00 〜 15：00 Class（現代社会学、人間進化学、化学－カーボンについて）の講義をそれぞれ選択して出席する。15：00 〜 16：00 日本剣道形稽古 16：00 〜 18：00 剣道合同稽古　18：00 〜 19：00 夕食　21：00 〜 23：30 Social with Kendo Students

21日 9 ：00 〜 10：00 ハーバードの学生とともに Annenberg 食堂で朝食（22） 10：00 〜 11：00 日本剣道形稽古　昼食後、13：00 〜 15：00 剣道合同稽古　16：00〜19：30 Boston Tour/dinner　20：00 〜 23：30 Social with Kendo Students

22日 9 ：00〜10：00 朝食　10：00〜11：00 日本剣道形稽古　11：00 〜 13：00 剣道合同稽古　13：00〜14：00 昼食　14：00〜15：30 Students move into Homestay　15：30〜20：30 Free Time（packing, buying, souvenirs, etc.） 21：00〜23：00 Farewell Dinner

23日10：00 Boston Logan Airport へ出発 12：00 Return Flight Departs

以上のように、ハーバード生と寝食を共にして講義にも参加し、剣道を通して素晴らしい友人（ハーバード生のみならず慶應生同士も）を作ることができたことは一生の宝だと思います。また、このプログラムに参加したことによって国際的コミュニケーションの重要性を再認識するとともに、かけがえのない経験をしたと思います。

Ⅲ．教育活動記録

（教育委員会）

Ⅲ－１．授業の実施

１．平成27年度体育科目の履修者統計

本年度も、体育科目を広報するパンフレットやホームページを活用し、体育科目情報の視覚的なアピールを行った。しかし、履修者の集計の結果、体育科目全体の履修者数は7062名（前年比－305名）となり、３年ぶりに履修者減となった。以下に詳細な履修者統計を示し、本年度教育活動の報告と次年度に向けた課題を挙げる。

１）体育学講義と体育学演習

平成27年度は、体育学講義８コマ（前年比－２）、体育学演習１コマ（同比同数）を開講した。体育学講義のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-1に、体育学演習のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-2に示す。本年度も設置授業数・設置曜日・時限の見直しを実施し、その結果講義科目が２コマ減となった。履修者数の合計は、体育学講義で245名（前年比＋15.6%）、体育学演習で６名（同比同数）であった。１コマあたりの履修者数は、体育学講義では30.6名（前年比＋44.5%）と、コマ数が減少したにも関わらず履修者が増加し、１コマあたりの人数も大幅に増加した。ここ数年は、講義科目の履修者が増えており、スポーツを様々な視点から捉えようとする塾生が増していることがうかがえる。今後も様々な視点からスポーツを捉える講義内容をそろえ、塾生に多様な体育・スポーツを伝えられるよう準備していく。

２）体育実技 A・B

表Ⅲ-1-3に体育実技Ａ（ウィークリースポーツクラス）の担当者とそれぞれの担当種目、表Ⅲ-1-4に体育実技Ａ（ウィークリースポーツクラス）の種目別履修状況を示す。表Ⅲ-1-4に示すように、日吉・三田・芝共立合計で7222名の申込（前年比－5.1%）に対し、最終的に6536名の履修者（同比－4.0%）となった。定員に対する充足率は、全体で79%となり、前年を７%程下回った。また、三田・芝共立キャンパス設置科目は、合わせた充足率が62%となった（三田：前年比－11%、芝共立：同比－24%）。３年ぶりに履修者が減少した背景には、社会情勢や広報活動の不足、授業内容のミスマッチなど様々な要因があると考えられる。より詳細な分析によると、２年生と４年生の履修者人数が減少してい

表Ⅲ-1-1. 平成27年度 体育学講義のタイトル及び担当者

講　義　名	コマ数			履修者数
	春	秋	計	
スポーツの効用を科学的にみる（スポーツ総論）	1		1	11
スポーツ心理学の世界	1		1	56
スポーツと身体（からだ）の基礎理論	1		1	110
スポーツコーチング概論	1		1	16
ブラインドサッカー論	1			19
スポーツの技と文化を探る		1	1	14
健康と運動の科学		1	1	9
スポーツ現場のコーチングと安全教育		1	1	10

表Ⅲ-1-2. 平成27年度 体育学演習のタイトル及び担当者

講　義　名	コマ数			履修者数
	春	秋	計	
スポーツ現場における救急法の基礎	1		1	6

る。４年生に限れば就職活活動期間の変更など外的な要因もあるが、昨年度の授業において、継続して授業を履修して運動を続けたいという動機を塾生に持たせられなかった可能性もある。より質が高く、塾生が身体を動かす喜び、技能を習得する面白さを体験できるような授業を展開できるようにしていく必要がある。

表Ⅲ-1-5に体育実技Ａ・B(シーズンスポーツクラス）の各種目の担当者及び履修状況を示す。平成27年度は９種目（前年比同数）を開講した。履修者数は275名（前年比－18.6%）で、充足率は71%(同比－17%)になった。シーズンスポーツでも履修者の減少となったが、

表Ⅲ-1-3. 平成27年度　体育実技Ａ・Ｂ（ウィークリースポーツクラス）担当者及び担当種目

	担当者	種　　目
教　　授	近藤　明彦	ウォーキングエクササイズ，ジョギング，陸上競技，フィットネストレーニング
〃	佐々木玲子	エアロビクス
〃	植田　史生	
〃	綿田　博人	野球，ゴルフ
〃	石手　　靖	バレーボール
〃	村山　光義	フライングディスク，ニュースポーツ，インドアスポーツ
〃	加藤　大仁	バスケットボール
准　教　授	山内　　賢	ハンドボール，フィットネストレーニング
〃	吉田　泰将	剣道，ソフトボール
〃	板垣　悦子	ボディメイク・エクササイズ，ボディコンディショニング（ピラティス）
〃	加藤　幸司	バドミントン
〃	須田　芳正	サッカー，フットサル
〃	野口　和行	バレーボール，ニュースポーツ，バックカントリースキル（バックパッキング，カヤック）
〃	村松　　憲	テニス
専任講師	鳥海　　崇	水泳
〃	奥山　静代	ボディコンディショニング（エアロビクス＆ヨガ），バレーボール
〃	坂井　利彰	テニス
助教（有期）	永田　直也	バスケットボール
〃	福士　徳文	サッカー，フットサル
非常勤講師	赤井　宏司	ソフトテニス
〃	朝飛　　大	柔道
〃	池田　知弘	自動車
〃	池本　和隆	水泳
〃	石渡　千草	ソフトボール
〃	岩崎　　陸	フットサル
〃	岡田　雅俊	軟式野球
〃	小澤　宏幸	テニス
〃	折笠　　愛	バレーボール
〃	勝又　正浩	ゴルフ
〃	金指みの利	バレエエクササイズ

年度によって履修者の増減が大きく、安定した充足率を得られていない。この点については、継続的な広報活動と、魅力ある授業内容の再検討を図り、安定した多数の履修者を獲得していきたい。

	担当者	種　　目
非常勤講師	川嶋　弘文	卓球
〃	木塚　孝幸	バスケットボール
〃	木下　佳子	バスケットボール
〃	木林　弥生	卓球
〃	久保田正美	空手
〃	孔　　徳勝	太極拳
〃	河乃　建仁	気功
〃	酒井　絵梨	テニス
〃	佐藤　達也	アーチェリー
〃	島田桂太郎	ボクシング
〃	首藤　聡史	器械体操
〃	杉本　亮子	ボディコンディショニング（ヨガ＆ピラティス）
〃	鈴木　王香	フィットネストレーニング
〃	鷲見　全弘	水泳
〃	竹村りょうこ	テニス
〃	多治見麻子	バレーボール
〃	田中　雅子	エアロビクス
〃	竹生　淑子	フェンシング
〃	円谷　洋一	弓術
〃	寺田　好秀	テニス
〃	藤平　信一	合氣道
〃	冨田　　賢	フットサル
〃	中田　大輔	トランポリン
〃	西室　　陽	フットサル
〃	原　荘太郎	テニス
〃	平野　泰宏	バドミントン
〃	弘　　卓三	フィットネストレーニング
〃	宮脇　利行	卓球
〃	矢作　拓也	バレーボール
〃	吉田　康之	剣道

表Ⅲ-1-4. 平成27年度　体育実技Ａ・Ｂ（ウィークリースポーツクラス）種目別履修状況

地区	科目名	定員	登録数	倍率	最終履修者数	充足率
日吉地区開設	アーチェリー	88	113	1.28	83	94%
	合氣道	60	61	1.02	60	100%
	ウォーキングエクササイズ	120	18	0.15	23	19%
	エアロビクス	240	180	0.75	209	87%
	空手	56	22	0.39	25	45%
	器械体操	20	23	1.15	20	100%
	気功	120	122	1.02	112	93%
	剣道	120	15	0.13	18	15%
	ゴルフ	256	283	1.11	245	96%
	サッカー	470	272	0.58	330	70%
	自動車	120	119	0.99	116	97%
	柔道	120	24	0.20	26	22%
	ジョギング	30	12	0.40	15	50%
	水泳	320	234	0.73	239	75%
	ソフトテニス	40	17	0.43	20	50%
	ソフトボール	192	183	0.95	175	91%
	太極拳	30	38	1.27	26	87%
	卓球	448	322	0.72	328	73%
	テニス	800	880	1.10	762	95%
	トランポリン	60	110	1.83	60	100%
	軟式野球	60	59	0.98	60	100%
	ニュースポーツ	100	83	0.83	100	100%
	バスケットボール	660	712	1.08	596	90%
	バックカントリースキル（バックパッキング）	20	8	0.40	5	25%
	バックカントリースキル（カヤック）	20	6	0.30	8	40%
	バドミントン	396	549	1.39	378	95%
	バレエエクササイズ	120	127	1.06	106	88%
	バレーボール	636	547	0.86	435	68%
	ハンドボール	120	63	0.53	78	65%
	フィットネストレーニング	440	249	0.57	324	74%
	フェンシング	44	42	0.95	41	93%
	フットサル	550	492	0.89	477	87%
	フライングディスク	50	31	0.62	41	82%
	ボクシング	160	93	0.58	104	65%
	ボディコンディショニング（エアロビクス&ヨガ）	120	96	0.80	94	78%
	ボディコンディショニング（ピラティス）	120	170	1.42	119	99%
	ボディコンディショニング（ヨガ&ピラティス）	120	228	1.90	120	100%
	ボディメイクエクササイズ	40	42	1.05	42	105%
	野球	120	100	0.83	101	84%
	陸上競技	20	6	0.30	8	40%
	日吉合計	7626	6751	0.89	6129	80%
三田地区開設	テニス	196	185	0.94	157	80%
	バレーボール	100	56	0.56	29	29%
	弓術	100	102	1.02	93	93%
	剣道	80	23	0.29	23	29%
	合氣道	60	40	0.67	40	67%
	三田合計	536	406	0.76	342	64%
芝共立地区開設	ボディメイクエクササイズ	40	40	1.00	40	100%
	インドアスポーツ	80	25	0.31	25	31%
	芝共立合計	120	65	0.54	65	54%
全体合計		8282	7222	0.87	6536	79%

表Ⅲ-1-5. 平成27年度　体育実技Ａ・Ｂ（シーズンスポーツクラス）担当者及び履修状況

	月	科　目　名	担当者	定員	登録数	倍率	最　終 履修者数	充足率
春学期	8月	弓術	高橋　道雄	40	50	1.25	40	100%
		マリンスポーツアクティビティ	鷲見　全弘	25	17	0.68	24	96%
		馬術（Ｂ）	高見　幸生	32	27	0.84	29	91%
		山岳「Nature & Trail」（Ｂ）	丸　誠一郎	25	13	0.52	15	60%
		ヨット（Ｂ）	金子　隆司	25	16	0.64	18	72%
		ビーチバレー（Ｂ）	石手　　靖	30	22	0.73	25	83%
秋学期	9月	アウトドアレクリエーション（Ｂ）	野口　和行	50	25	0.50	27	54%
	2月	スキー（Ｂ）	吉田　久男	120	53	0.44	62	52%
		スケート（Ｂ）	小山　　正	40	32	0.80	35	88%
計				387	255	0.66	275	71%

２．授業評価の実施

体育研究所では、体育実技を履修した学生による授業評価を長年継続的に実施し、より適切な授業展開のための基礎資料を得て、授業改善に取り組んでいる。専任教員に加え、非常勤講師（ウィークリースポーツ）においても平成23年度秋学期より web 方式によるアンケートの回収を継続している。

実施に際してはこれまでと同様に、授業終了２週間前より入力可能として、回答人数を把握することにより、未実施者に対しては残りの授業で実施を促した。

以下、集計を行った。表Ⅲ-1-6はアンケート回答者数、表Ⅲ-1-7、８にはアンケート調査用紙の質問項目を示した。アンケートの各質問項目には「強くそう思う」（５点）、「そう思う」（４点）、「どちらとも言えない」（３点）、「そうは思わない」（２点）、「全くそう思わない」（１点）の５段階で回答させ、得点化して評価した。Web 方式によるアンケートでは、回答の時間に制限がないため、自由記述に意見を書きやすいというメリットがあるが、回答率は紙面方式より低下しているのが現状である。引き続き、各教員が積極的にアンケートへの回答を促す努力を続けなければならない。

表Ⅲ -1-6. 授業評価アンケート回答者数

	アンケート総数
春学期ウィークリー	1256
秋学期ウィークリー	621
春学期講義・演習	56
秋学期講義・演習	12
シーズン	77

表Ⅲ-1-7. 授業評価アンケート質問項目（講義・演習・実技）

履修者全員（講義・演習・実技）回答	
設問 1	曜日時限を選択してください
設問 2	実施地区を選択してください
設問 3	自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した
設問 4	教員は授業の目的および目標をわかりやすく説明した
設問 5	教員の指導・教授方法は適切であった
設問 6	教員はこの授業についての十分な知識を持っていた
設問 7	教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した
設問 8	教員の話し方は聞き取りやすかった
設問 9	この授業は塾生にとってふさわしいものだった
設問10	この授業は自分にとって満足出来るものであった
設問11	この授業によって知識を深めることができた
設問12	この授業の目的・ねらいを十分理解できた
設問13	この授業の内容は興味のあるものだった
設問14	このクラスの雰囲気は良好であった
設問15	自分はこの授業に意欲的に取り組んだ
実技履修者のみ回答	
設問16	この授業は健康や体力の向上に役立った
設問17	この授業によって運動技術が向上した
設問18	運動量は適切であった
講義・演習履修者のみ回答	
設問19	配布資料やプレゼンテーションが適切であった
自由記述	
設問20	この授業を履修した理由・動機について記入してください
設問21	授業内容について記入してください（良かった事）
設問22	授業内容について記入してください（改善を要求することなど）
設問23	担当教員について記入してください（良かった事）
設問24	担当教員について記入してください（改善を要求することなど）
設問25	施設および機器・用具等について記入してください（良かった事）
設問26	施設および機器・用具等について記入してください（改善を要求することなど）
設問27	体育科目全般に関する意見および提案について記入してください

表Ⅲ-1-8. 授業評価アンケート質問項目（シーズンスポーツ）

選択肢からの回答	
設問 1	自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した
設問 2	教員は授業の目的および目標をわかりやすく説明した
設問 3	教員の指導・教授方法は適切であった
設問 4	教員はこの授業についての十分な知識を持っていた
設問 5	教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した
設問 6	教員の話し方は聞き取りやすかった
設問 7	この授業は塾生にとってふさわしいものだった
設問 8	この授業は自分にとって満足出来るものであった
設問 9	この授業によって知識を深めることができた
設問10	この授業の目的・ねらいを十分理解できた
設問11	この授業の内容は興味のあるものだった
設問12	このクラスの雰囲気は良好であった
設問13	自分はこの授業に意欲的に取り組んだ
設問14	この授業は健康や体力の向上に役立った
設問15	この授業によって運動技術が向上した
設問16	運動量は適切であった
自由記述	
設問17	この授業を履修した理由・動機について記入してください
設問18	授業内容について記入してください（良かった事）
設問19	授業内容について記入してください（改善を要求することなど）
設問20	担当教員について記入してください（良かった事）
設問21	担当教員について記入してください（改善を要求することなど）
設問22	施設および機器・用具等について記入してください（良かった事）
設問23	施設および機器・用具等について記入してください（改善を要求することなど）
設問24	体育科目全般に関する意見および提案について記入してください

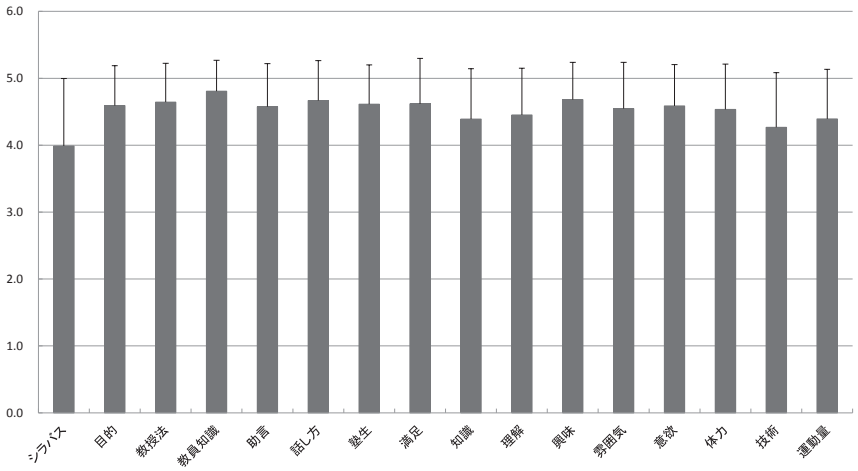
1）体育実技ウィークリー種目の授業評価

体育実技ウィークリー種目における質問項目別５段階評価（平均値±標準偏差）を図Ⅲ-1-1（春学期）、図Ⅲ-1-2（秋学期）に示した。結果をみるとほぼ例年と同様の傾向であり、以下のようにまとめられる。

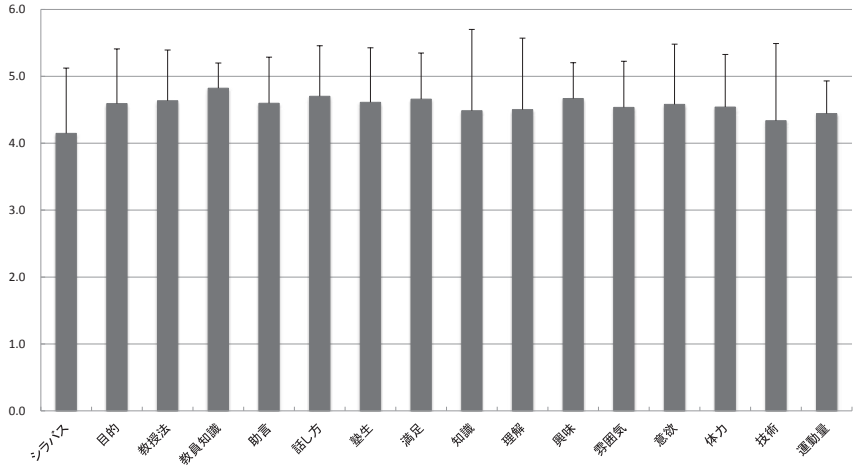
春・秋の学期間に差はほとんどなく、同じ傾向が得られている。全般に４点以上の肯定的評価がほとんどであった。平均値で最も高い評価となったものは、「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」（春：4.8±0.5、秋：4.8±0.4）であり、「教員の指導・教授方法は適切であった」、「教員の話し方は聞き取りやすかった」等教員に対する評価に加え、「満足度」も高い値を示した。

一方、最も平均点が低いものは「自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した」であった（春:4.0±1.0、秋:4.1±1.0）。このことは、曜日や時限による制約から単に時間割を埋めるために履修していたり、第１希望の種目に抽選漏れした学生が他の種目を履修していたりすることが考えられる。

表Ⅲ-1-9、10には春学期・秋学期の種目別の５段階評価を示した。その結果「運動技術の向上」、などが低い値を示し、気功などが３点台であった。種目の違いにより技術向上の難易度は異なるため、そのことを教員が理解させながら履修者に伝える必要があると考えられる。



図Ⅲ-1-1. 授業に関する質問項目別の５段階評価（春学期ウィークリー全体平均）



図Ⅲ-1-2. 授業に関する質問項目別の５段階評価（秋学期ウィークリー全体平均）

表Ⅲ-1-9. 種目別の5段階評価集計一覧（春学期ウィークリー）

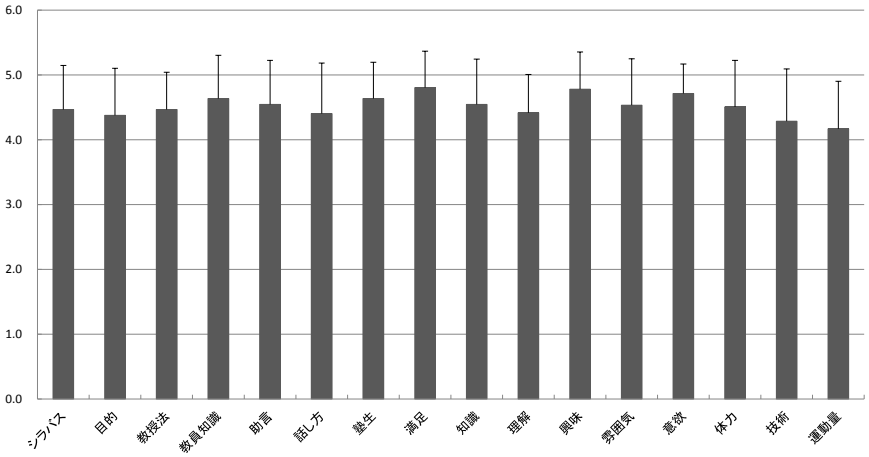
種目名	人数		シラバス	目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	理解	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
アーチェリー	17	平均	4.4	4.6	4.8	4.9	4.6	4.9	4.8	4.8	4.9	4.7	4.8	4.6	4.7	4.5	4.1	4.5
		標準偏差	0.8	0.5	0.4	0.2	0.8	0.3	0.4	0.4	0.3	0.5	0.4	0.5	0.5	0.6	0.8	0.5
合氣道	24	平均	4.3	4.8	4.8	4.9	4.7	4.9	4.8	4.7	4.7	4.4	4.8	4.7	4.6	4.5	4.0	4.4
		標準偏差	0.8	0.4	0.4	0.3	0.6	0.3	0.4	0.7	0.6	0.7	0.4	0.6	0.5	0.7	0.9	0.8
インドアスポーツ	4	平均	4.3	4.5	5.0	5.0	4.8	5.0	5.0	5.0	4.8	4.8	5.0	5.0	4.8	5.0	4.8	4.8
		標準偏差	1.0	0.6	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.5	0.5	0.0	0.0	0.5	0.0	0.5	0.5
ウォーキングエクササイズ	4	平均	3.0	3.8	4.5	4.0	4.5	5.0	4.3	4.0	4.5	4.3	4.0	4.0	4.0	4.0	3.3	4.3
		標準偏差	0.8	0.5	0.6	1.4	0.6	0.0	1.0	1.4	0.6	0.5	0.8	2.0	1.4	0.8	0.6	0.5
エアロビクス	49	平均	4.0	4.6	4.9	4.9	4.6	4.8	4.7	4.8	4.5	4.5	4.7	4.6	4.6	4.6	4.0	4.6
		標準偏差	0.9	0.5	0.4	0.2	0.5	0.4	0.5	0.5	0.6	0.5	0.6	0.6	0.5	0.6	0.9	0.5
空手	8	平均	3.8	4.8	4.9	5.0	5.0	5.0	4.6	4.8	4.5	4.5	4.5	4.8	4.3	4.4	4.5	4.6
		標準偏差	1.4	0.7	0.4	0.0	0.0	0.0	0.7	0.7	0.8	0.8	0.8	0.7	1.4	0.9	0.8	0.7
気功	16	平均	4.3	4.6	4.4	4.9	4.5	3.4	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.5	4.6	4.2	3.0	4.1
		標準偏差	0.6	0.5	0.6	0.3	0.6	0.8	0.5	0.5	0.5	0.6	0.5	0.6	0.5	0.8	1.0	0.8
弓術	10	平均	3.8	4.6	4.6	4.9	4.6	4.7	4.9	4.9	4.4	4.6	4.9	4.6	4.6	4.4	4.3	4.5
		標準偏差	0.9	1.0	1.0	0.3	0.7	0.5	0.3	0.3	0.8	0.7	0.3	0.5	0.7	0.7	0.7	0.5
剣道	2	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.5
		標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7
剣道（日本剣道形）	1	平均	4.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ゴルフ	40	平均	4.0	4.3	4.1	4.6	4.0	4.6	4.4	4.2	4.3	4.3	4.6	3.8	4.4	4.1	4.2	4.1
		標準偏差	0.9	0.8	0.9	0.7	0.9	0.6	0.8	1.0	0.8	0.8	0.5	1.0	0.7	0.9	0.7	0.9
サッカー	70	平均	3.7	4.6	4.7	4.9	4.7	4.8	4.6	4.6	4.2	4.5	4.6	4.5	4.4	4.5	4.2	4.4
		標準偏差	1.2	0.7	0.5	0.3	0.6	0.4	0.6	0.7	0.8	0.6	0.6	0.7	0.7	0.6	0.8	0.7
自動車	17	平均	4.3	4.6	4.1	4.3	4.2	4.1	4.4	4.4	4.3	4.3	4.6	4.4	4.4	3.4	3.9	3.7
		標準偏差	1.2	0.6	0.9	0.9	0.8	1.0	0.8	0.9	0.6	0.8	0.5	0.6	0.5	1.3	1.1	1.3
柔道	5	平均	4.0	4.8	5.0	5.0	5.0	4.8	4.8	4.6	4.8	4.0	4.8	4.8	4.6	5.0	4.6	4.8
		標準偏差	1.2	0.4	0.0	0.0	0.0	0.4	0.4	0.5	0.4	0.7	0.4	0.4	0.9	0.0	0.5	0.4
水泳	58	平均	4.1	4.7	4.7	4.9	4.6	4.7	4.8	4.7	4.5	4.6	4.7	4.7	4.7	4.7	4.4	4.5
		標準偏差	1.0	0.5	0.5	0.3	0.6	0.6	0.5	0.6	0.8	0.5	0.6	0.5	0.5	0.5	0.8	0.7
ソフトテニス	7	平均	4.6	4.9	5.0	5.0	4.9	4.6	4.7	5.0	4.9	4.9	5.0	4.7	4.7	5.0	4.7	4.9
		標準偏差	0.5	0.4	0.0	0.0	0.4	0.8	0.5	0.0	0.4	0.4	0.0	0.5	0.5	0.0	0.5	0.4
ソフトボール	25	平均	3.5	4.4	4.7	4.7	4.7	5.0	4.8	4.8	4.2	3.9	4.9	4.7	4.8	4.6	4.3	4.6
		標準偏差	1.3	0.8	0.5	0.5	0.5	0.2	0.4	0.5	1.0	1.4	0.3	0.5	0.5	0.6	0.9	0.7
太極拳	11	平均	4.3	4.5	4.8	5.0	4.5	4.1	4.4	4.5	4.5	4.2	4.5	4.5	4.3	4.2	3.5	4.2
		標準偏差	0.6	0.7	0.4	0.0	0.7	0.9	0.7	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.8	1.0	0.9	1.3
卓球	73	平均	3.8	4.6	4.5	4.8	4.5	4.6	4.5	4.5	4.3	4.4	4.6	4.6	4.5	4.4	4.3	4.4
		標準偏差	1.0	0.6	0.7	0.5	0.7	0.5	0.7	0.8	0.7	0.7	0.7	0.7	0.5	0.7	0.7	0.7
テニス	149	平均	3.9	4.5	4.6	4.8	4.5	4.7	4.5	4.4	4.3	4.4	4.5	4.4	4.5	4.5	4.2	4.2
		標準偏差	0.9	0.5	0.6	0.5	0.7	0.6	0.6	0.8	0.8	0.7	0.7	0.8	0.7	0.7	0.9	0.9
トランポリン	13	平均	4.5	4.6	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.6	4.4	4.5	4.8	4.6	4.8	4.8	4.5	4.3
		標準偏差	0.8	0.5	0.4	0.6	0.6	0.4	0.4	0.8	0.8	0.7	0.4	0.5	0.6	0.4	0.9	0.9
軟式野球	11	平均	4.4	4.5	4.5	4.9	4.5	4.5	4.5	4.6	4.3	4.5	4.6	4.5	4.5	4.3	3.9	4.1
		標準偏差	0.7	0.5	0.5	0.3	0.5	0.5	0.7	0.7	1.0	0.8	0.7	0.5	0.9	0.9	1.1	0.9
ニュースポーツ	20	平均	3.9	4.5	4.7	4.7	4.7	4.7	4.6	4.6	4.2	4.0	4.7	4.6	4.6	4.2	3.9	4.0
		標準偏差	1.3	0.8	0.6	0.9	0.7	0.6	0.7	0.9	0.9	1.2	0.7	0.6	0.6	0.9	1.0	1.1
バスケットボール	126	平均	4.0	4.7	4.6	4.8	4.6	4.7	4.6	4.7	4.4	4.6	4.8	4.7	4.7	4.8	4.6	4.6
		標準偏差	1.1	0.6	0.6	0.4	0.7	0.6	0.5	0.6	0.8	0.7	0.5	0.6	0.5	0.5	0.7	0.6
バックカントリースキル（カヤック）	6	平均	4.8	5.0	5.0	4.7	5.0	4.8	5.0	5.0	4.3	4.7	5.0	5.0	5.0	4.8	4.5	4.3
		標準偏差	0.4	0.0	0.0	0.8	0.0	0.4	0.0	0.0	1.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.4	0.8	0.8
バックカントリースキル（バックパッキング）	0	平均	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
バドミントン	67	平均	3.9	4.5	4.6	4.8	4.4	4.3	4.4	4.6	4.4	4.2	4.6	4.6	4.6	4.3	4.3	4.4
		標準偏差	0.9	0.7	0.7	0.4	0.7	1.0	0.7	0.8	0.8	0.9	0.6	0.6	0.6	0.9	0.7	0.7
バレエエクササイズ	27	平均	4.4	4.4	4.7	4.7	4.7	4.9	4.8	4.7	4.3	4.3	4.8	4.8	4.7	4.8	4.4	4.3
		標準偏差	0.6	0.6	0.4	0.5	0.5	0.3	0.4	0.6	0.6	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.7	0.7
バレーボール	92	平均	3.8	4.6	4.8	4.8	4.8	4.7	4.7	4.8	4.5	4.5	4.8	4.8	4.8	4.7	4.4	4.7
		標準偏差	1.1	0.6	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.4	0.7	0.6	0.4	0.5	0.5	0.5	0.8	0.5
ハンドボール	23	平均	4.0	4.6	4.6	4.9	4.4	4.5	4.7	4.8	4.4	4.5	4.7	4.7	4.7	4.8	4.3	4.4
		標準偏差	1.1	0.5	0.5	0.3	0.7	0.6	0.4	0.5	0.6	0.5	0.6	0.5	0.7	0.4	0.6	0.7
フィットネストレーニング	69	平均	4.1	4.6	4.6	4.7	4.6	4.7	4.5	4.5	4.4	4.5	4.7	4.4	4.6	4.6	4.3	4.3
		標準偏差	0.8	0.6	0.6	0.6	0.5	0.5	0.6	0.7	0.7	0.6	0.5	0.7	0.6	0.5	0.7	0.6
フェンシング	7	平均	4.1	4.4	4.7	4.9	4.4	4.4	4.3	4.7	4.4	4.3	4.7	4.9	4.4	4.4	4.0	3.7
		標準偏差	0.9	0.5	0.5	0.4	0.5	0.8	0.8	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	1.2	0.5
フットサル	109	平均	3.8	4.7	4.7	4.8	4.7	4.8	4.7	4.7	4.3	4.5	4.7	4.5	4.6	4.6	4.4	4.5
		標準偏差	1.1	0.6	0.5	0.5	0.6	0.5	0.6	0.6	0.9	0.6	0.6	0.7	0.6	0.6	0.8	0.6
フライングディスク	9	平均	3.1	4.7	4.8	5.0	4.4	4.7	4.6	4.9	4.4	4.3	4.6	4.6	4.4	4.6	4.1	4.6
		標準偏差	1.2	0.5	0.4	0.0	0.7	0.5	0.7	0.3	0.7	0.7	0.7	0.7	0.5	0.5	0.8	0.5
ボクシング	13	平均	3.8	4.8	4.8	4.9	4.8	4.7	4.5	4.8	4.7	4.6	4.8	4.5	4.5	4.6	4.5	4.5
		標準偏差	1.3	0.6	0.4	0.3	0.4	0.5	0.7	0.4	0.5	0.5	0.4	0.7	0.5	0.5	0.7	0.7
ボディコンディショニング（エアロビクス＆ヨガ）	17	平均	4.4	4.8	4.8	4.8	4.7	4.8	4.8	4.9	4.7	4.8	4.8	4.6	4.6	4.5	4.4	4.5
		標準偏差	0.7	0.4	0.4	0.4	0.5	0.4	0.4	0.3	0.5	0.4	0.4	0.5	0.7	0.6	0.9	0.6
ボディコンディショニング（ピラティス）	25	平均	4.4	4.6	4.7	4.8	4.6	4.8	4.5	4.6	4.6	4.6	4.6	4.4	4.4	4.6	4.0	4.1
		標準偏差	0.6	0.5	0.5	0.4	0.7	0.5	0.6	0.7	0.5	0.5	0.5	0.8	0.8	0.6	0.8	0.9
ボディコンディショニング（ヨガ＆ピラティス）	13	平均	4.2	4.8	4.7	4.8	4.3	4.7	4.7	4.5	4.3	4.5	4.5	4.5	4.5	4.3	4.0	4.3
		標準偏差	0.7	0.4	0.6	0.4	0.6	0.6	0.5	0.8	0.8	0.7	0.8	0.7	0.7	0.9	1.1	0.9
ボディメイクエクササイズ	3	平均	4.7	4.3	4.7	4.7	4.7	4.7	4.7	4.7	4.3	4.0	4.7	4.7	4.7	4.3	4.0	4.7
		標準偏差	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	1.0	0.6	0.6	0.6	0.6	1.0	0.6
野球	11	平均	4.7	4.5	4.5	5.0	4.2	4.7	4.7	4.7	4.4	4.0	4.7	4.1	4.6	4.8	4.0	4.1
		標準偏差	0.5	0.7	0.7	0.0	1.0	0.5	0.5	0.5	0.9	1.0	0.5	0.8	0.5	0.4	1.1	0.8
陸上競技	5	平均	4.2	4.8	4.6	5.0	4.4	4.6	4.6	5.0	4.6	4.4	5.0	5.0	5.0	4.2	4.6	4.4
		標準偏差	1.3	0.4	0.5	0.0	0.9	0.5	0.9	0.0	0.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.8	0.5	0.5
実技全体	1256	平均	4.0	4.6	4.6	4.8	4.6	4.7	4.6	4.6	4.4	4.5	4.7	4.5	4.6	4.5	4.3	4.4
		標準偏差	1.0	0.6	0.6	0.5	0.6	0.6	0.6	0.7	0.8	0.7	0.6	0.7	0.6	0.7	0.8	0.7

表Ⅲ-1-10. 種目別の5段階評価集計一覧（秋学期ウィークリー）

種目名	人数		シラバス	目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	理解	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
アーチェリー	6	平均	4.5	4.7	4.8	4.8	5.0	4.8	4.8	4.8	4.7	4.3	4.8	4.5	4.8	3.8	3.8	4.0
		標準偏差	0.5	0.5	0.4	0.4	0.0	0.4	0.4	0.4	0.5	0.5	0.4	0.5	0.4	0.8	1.0	0.6
合氣道	18	平均	4.3	4.9	4.7	5.0	4.8	4.9	4.7	4.9	4.5	4.6	4.8	4.9	4.6	4.7	4.3	4.4
		標準偏差	0.8	0.3	0.6	0.0	0.5	0.3	0.5	0.3	0.7	0.6	0.4	0.3	0.9	0.5	0.7	0.5
インドアスポーツ	3	平均	4.3	5.0	5.0	5.0	5.0	4.7	4.7	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.7	4.7	4.3	4.3
		標準偏差	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.6	0.6	0.6
ウォーキングエクササイズ	5	平均	4.2	4.0	4.0	4.4	4.0	4.0	4.4	4.6	4.2	4.2	4.6	4.4	4.2	4.4	3.8	4.0
		標準偏差	0.4	0.0	0.0	0.5	0.0	0.7	0.5	0.5	0.4	0.4	0.5	0.5	0.4	0.5	0.4	0.0
エアロビクス	19	平均	4.2	4.7	4.8	4.8	4.7	4.8	4.7	4.8	4.7	4.8	4.7	4.6	4.8	4.6	4.3	4.6
		標準偏差	0.6	0.5	0.4	0.5	0.5	0.4	0.5	0.4	0.6	0.4	0.5	0.7	0.4	0.6	0.7	0.6
空手	5	平均	3.4	4.0	4.4	4.8	4.0	4.8	4.0	4.0	4.0	4.0	3.8	4.4	3.6	4.4	4.2	4.0
		標準偏差	1.3	0.7	0.5	0.4	0.0	0.4	0.7	0.7	0.7	0.0	1.6	0.9	1.5	0.9	0.8	0.7
器械体操	4	平均	4.5	4.8	4.8	5.0	4.3	5.0	5.0	5.0	4.5	5.0	5.0	4.8	5.0	4.7	5.0	4.7
		標準偏差	0.6	0.5	0.5	0.0	1.5	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.0	0.5	0.0	0.6	0.0	0.6
気功	15	平均	4.4	4.5	4.5	4.9	4.3	3.5	4.5	4.7	4.2	4.2	4.5	4.5	4.1	4.1	3.4	4.1
		標準偏差	0.6	0.6	0.5	0.3	0.6	0.9	0.5	0.5	1.1	0.6	0.5	0.6	0.8	0.7	1.1	0.7
弓術	4	平均	3.5	4.5	4.8	5.0	4.8	4.8	4.5	4.8	4.8	4.5	4.8	4.0	4.3	3.8	4.8	4.8
		標準偏差	1.3	0.6	0.5	0.0	0.5	0.5	0.6	0.5	0.5	0.6	0.5	1.4	1.0	1.9	0.5	0.5
剣道	7	平均	4.6	4.7	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.6	4.6	4.7
		標準偏差	0.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.5	0.5
剣道（日本剣道形）	1	平均	3.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	3.0	5.0	5.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
		標準偏差																
ゴルフ	21	平均	4.2	4.5	4.3	4.8	4.1	4.6	4.6	4.6	4.5	4.4	4.7	3.9	4.5	4.0	4.3	4.3
		標準偏差	0.6	0.6	0.8	0.4	0.9	0.6	0.5	0.6	0.6	0.6	0.5	0.9	0.7	1.0	0.8	0.6
サッカー	22	平均	3.9	4.5	4.6	4.9	4.6	4.8	4.9	4.7	4.4	4.5	4.8	4.5	4.6	4.5	4.5	4.5
		標準偏差	1.1	0.6	0.7	0.3	0.5	0.4	0.4	0.6	0.8	0.7	0.4	0.7	0.6	0.7	0.7	0.7
自動車	10	平均	4.4	4.5	4.2	4.7	4.7	4.3	4.7	4.4	4.4	4.4	4.7	4.4	4.5	3.4	4.2	3.7
		標準偏差	0.7	0.7	0.9	0.5	0.7	0.8	0.5	0.7	0.7	0.8	0.5	1.0	0.7	1.1	0.4	1.1
柔道	2	平均	3.5	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.5	4.5	4.0	4.5
		標準偏差	2.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.7	1.4	0.7
ジョギング	1	平均	3.0	4.0	4.0	5.0	4.0	4.0	3.0	3.0	4.0	4.0	3.0	3.0	3.0	4.0	3.0	3.0
		標準偏差																
水泳	14	平均	4.2	5.0	4.9	4.9	4.8	4.8	5.0	4.9	4.9	4.9	5.0	4.8	4.8	4.9	4.8	4.7
		標準偏差	0.9	0.0	0.3	0.3	0.4	0.6	0.0	0.3	0.3	0.3	0.0	0.4	0.4	0.3	0.4	0.8
ソフトテニス	3	平均	4.3	4.7	4.7	5.0	4.7	4.7	4.3	4.7	4.7	4.7	5.0	4.7	4.3	4.7	4.7	4.7
		標準偏差	1.2	0.6	0.6	0.0	0.6	0.6	1.2	0.6	0.6	0.6	0.0	0.6	1.2	0.6	0.6	0.6
ソフトボール	16	平均	4.4	4.5	4.6	4.7	4.6	5.0	4.8	4.7	4.5	4.3	4.8	4.6	4.6	4.9	4.5	4.7
		標準偏差	0.8	1.0	0.8	0.6	1.0	0.0	0.8	0.9	0.7	1.1	0.5	0.7	0.7	0.3	0.7	0.8
卓球	58	平均	4.0	4.5	4.7	4.8	4.5	4.7	4.5	4.6	4.4	4.4	4.6	4.6	4.5	4.5	4.3	4.5
		標準偏差	0.9	0.6	0.6	0.4	0.7	0.5	0.5	0.7	0.6	0.6	0.5	0.5	0.6	0.5	0.7	0.6
テニス	46	平均	3.9	4.7	4.7	4.8	4.5	4.7	4.5	4.5	4.5	4.4	4.6	4.5	4.6	4.4	4.3	4.3
		標準偏差	1.1	0.6	0.6	0.5	0.8	0.6	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.9	0.8	0.7	0.8	0.7
トランポリン	6	平均	4.5	4.3	4.2	4.8	4.5	4.8	3.5	4.8	4.2	4.0	4.8	4.3	4.7	4.7	4.8	4.2
		標準偏差	0.5	0.5	1.0	0.4	0.5	0.4	1.2	0.4	1.0	0.9	0.4	0.5	0.5	0.5	0.4	0.4
軟式野球	6	平均	4.5	4.8	4.5	5.0	4.7	4.8	4.7	4.7	4.3	4.8	4.2	4.5	4.5	4.7	4.3	4.5
		標準偏差	0.5	0.4	0.5	0.0	0.5	0.4	0.5	0.8	0.8	0.4	0.8	0.5	0.5	0.5	0.8	0.8
ニュースポーツ	13	平均	4.3	4.5	4.9	5.0	4.8	5.0	4.7	4.8	4.7	4.6	4.8	5.0	4.8	4.4	4.4	4.6
		標準偏差	0.8	0.5	0.3	0.0	0.6	0.0	0.6	0.4	0.5	0.5	0.4	0.0	0.4	0.9	0.7	0.7
バスケットボール	74	平均	4.1	4.6	4.6	4.8	4.8	4.8	4.7	4.8	4.5	4.6	4.7	4.7	4.8	4.8	4.6	4.6
		標準偏差	1.0	0.7	0.6	0.4	0.6	0.5	0.5	0.5	0.7	0.6	0.6	0.5	0.6	0.5	0.7	0.6
バドミントン	17	平均	3.9	4.3	4.4	4.7	4.2	4.6	4.6	4.4	4.3	4.1	4.5	4.5	4.6	4.6	4.2	4.4
		標準偏差	1.1	1.0	0.9	0.7	1.1	0.6	0.9	1.0	1.0	1.3	0.9	0.8	0.6	0.6	1.1	0.7
バレエエクササイズ	10	平均	4.7	4.6	4.7	4.5	4.4	4.7	4.3	4.7	4.0	4.6	4.9	4.4	4.4	4.6	4.4	4.5
		標準偏差	0.5	0.5	0.5	0.7	0.5	0.5	0.8	0.5	0.7	0.5	0.3	0.5	0.8	0.5	0.7	0.5
バレーボール	48	平均	4.1	4.6	4.7	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.6	4.7	4.8	4.8	4.8	4.8	4.6	4.6
		標準偏差	1.1	0.6	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.5	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.7	0.7
ハンドボール	8	平均	4.0	4.6	4.5	4.8	4.5	4.4	4.8	4.5	4.5	4.4	4.6	4.4	4.5	4.6	4.4	4.4
		標準偏差	1.1	0.5	0.5	0.5	0.5	0.7	0.5	0.5	0.5	0.7	0.7	0.5	0.8	0.5	0.5	0.5
フィットネストレーニング	29	平均	4.2	4.6	4.6	4.7	4.6	4.5	4.4	4.6	4.4	4.4	4.6	4.3	4.7	4.7	4.2	4.4
		標準偏差	0.6	0.5	0.6	0.5	0.7	0.5	0.6	0.5	0.7	0.5	0.5	0.8	0.5	0.5	0.8	0.7
フェンシング	3	平均	4.3	4.3	4.7	4.7	4.3	4.7	4.7	4.7	4.7	4.3	4.3	4.7	4.0	3.7	4.0	4.0
		標準偏差	1.2	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	1.0	1.2	1.0	1.0
フットサル	63	平均	4.1	4.7	4.7	4.9	4.7	4.7	4.6	4.5	4.5	4.6	4.6	4.3	4.5	4.7	4.5	4.6
		標準偏差	0.9	0.5	0.8	0.4	0.5	0.5	0.9	1.0	0.7	0.6	0.8	1.2	0.8	0.4	0.6	0.6
フライングディスク	3	平均	4.3	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.0	4.3	5.0	5.0	5.0	4.3	5.0	4.3	4.3	3.7
		標準偏差	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.6	0.6	0.6
ボクシング	11	平均	4.3	4.7	4.9	5.0	4.6	4.6	4.5	4.6	4.6	4.5	4.7	4.5	4.4	4.7	4.5	4.3
		標準偏差	0.9	0.5	0.3	0.0	0.5	0.5	0.7	0.5	0.5	0.7	0.5	0.7	0.7	0.5	0.5	0.8
ボディコンディショニング（エアロビクス＆ヨガ）	9	平均	4.2	4.9	4.8	4.7	4.8	5.0	4.6	4.7	4.3	4.6	4.7	4.8	4.7	4.4	3.7	4.4
		標準偏差	1.0	0.3	0.4	0.5	0.4	0.0	0.7	0.5	0.7	0.5	0.5	0.4	0.5	0.7	1.1	0.5
ボディコンディショニング（ピラティス）	10	平均	4.7	4.9	4.9	5.0	4.8	4.9	5.0	4.9	4.4	4.4	5.0	4.7	4.8	4.4	4.3	4.8
		標準偏差	0.7	0.3	0.3	0.0	0.6	0.3	0.0	0.3	1.1	0.8	0.0	0.5	0.6	1.1	1.1	0.4
ボディコンディショニング（ヨガ＆ピラティス）	20	平均	4.4	4.4	4.4	4.7	4.3	4.8	4.5	4.4	4.4	4.3	4.4	4.1	4.4	4.2	3.6	4.0
		標準偏差	0.5	0.6	0.5	0.5	0.6	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.6	0.8	0.6	0.5	0.9	0.7
ボディメイクエクササイズ	4	平均	4.0	4.0	4.5	4.8	4.3	4.5	4.3	4.5	4.3	4.5	4.3	4.5	4.3	3.8	3.5	3.8
		標準偏差	0.0	0.0	0.6	0.5	0.5	0.6	0.5	0.6	0.5	0.6	0.5	0.6	0.5	0.5	0.6	1.0
野球	7	平均	3.6	4.0	4.3	4.9	3.9	4.3	4.0	4.1	3.9	4.1	4.6	3.9	3.9	4.4	4.0	4.3
		標準偏差	1.0	0.8	0.8	0.4	0.7	0.8	0.8	0.7	1.2	1.1	0.5	0.7	0.9	0.8	1.2	0.5
実技全体	621	平均	4.1	4.6	4.6	4.8	4.6	4.7	4.6	4.7	4.5	4.5	4.7	4.5	4.6	4.5	4.3	4.4
		標準偏差	1.0	0.8	0.8	0.4	0.7	0.8	0.8	0.7	1.2	1.1	0.5	0.7	0.9	0.8	1.2	0.5

2）シーズンスポーツ種目の授業評価

シーズンスポーツ種目における５段階評価（平均値±標準偏差）を図1-1-3に、また種目別の５段階評価を表1-1-11に示した。すべての項目とも平均値で４点をこえる肯定的評価が得られている。特に「この授業は自分にとって満足出来るものであった」（4.8±0.6）「この授業の内容は興味あるものだった」（4.8±0.6）、「自分はこの授業に意欲的に取り組んだ」（4.6±0.7）などが高い得点を示した。一方、「運動量は適切であった」は他の項目と比較して低い値を示した。



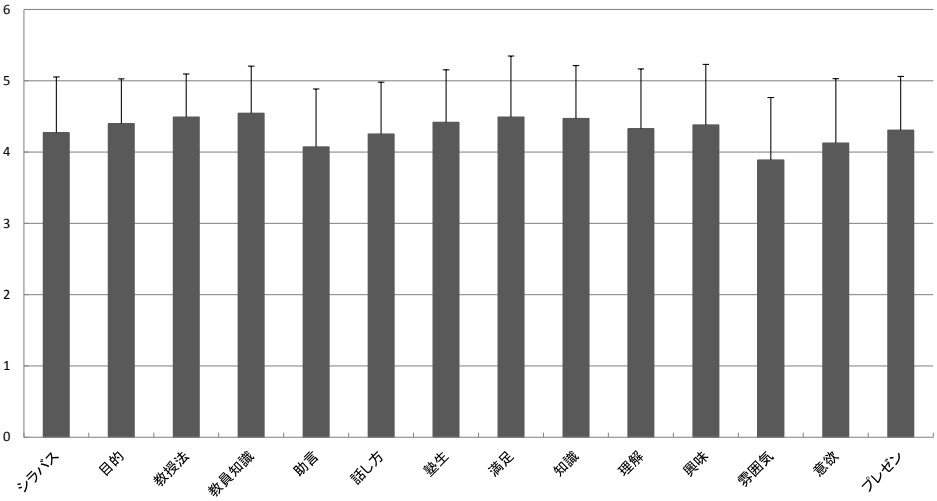
図Ⅲ-1-3. 授業に関する質問項目別の５段階評価（シーズンスポーツ全体平均）

表Ⅲ-1-11. 種目別の５段階評価集計一覧（シーズンスポーツ）

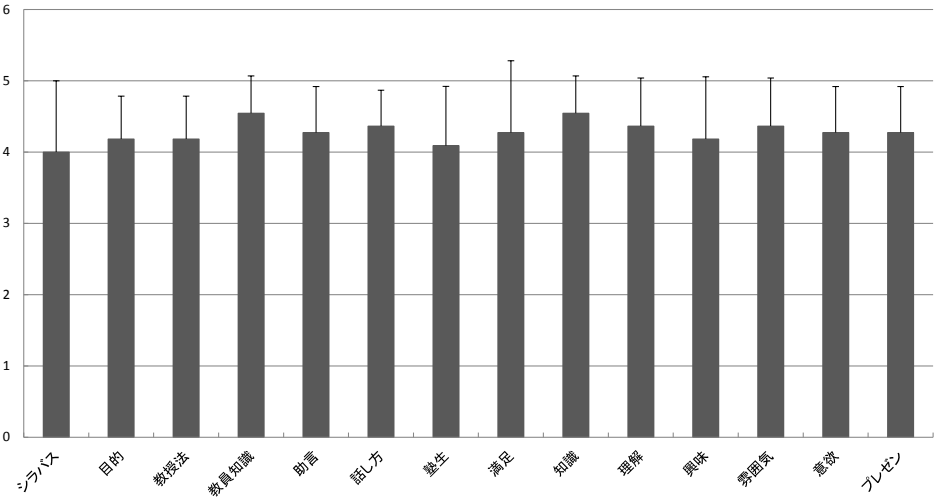
種目名	人数		シラバス	目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	理解	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
アウトドアレクリエーション	1	平均	5.0	4.0	4.0	5.0	4.0	5.0	4.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.0	4.0	3.0	3.0	3.0
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
弓術	6	平均	5.0	5.0	4.5	4.8	4.7	4.7	4.8	5.0	4.8	4.7	5.0	4.5	5.0	4.7	4.5	4.2
		標準偏差	0.0	0.0	0.5	0.4	0.5	0.5	0.4	0.0	0.4	0.5	0.0	0.8	0.0	0.5	0.5	0.8
Natuer & Trail	7	平均	4.6	4.7	4.9	5.0	4.9	4.6	4.9	5.0	4.6	4.6	4.9	4.9	4.6	4.7	4.1	4.0
		標準偏差	0.5	0.5	0.4	0.0	0.4	0.5	0.4	0.0	0.5	0.5	0.4	0.4	0.5	0.5	0.7	0.8
馬術	21	平均	4.6	4.0	4.3	4.7	4.4	4.2	4.4	4.7	4.6	4.3	4.8	4.4	4.6	4.2	4.1	4.1
		標準偏差	0.7	0.9	0.6	0.5	0.8	0.7	0.7	0.5	0.5	0.7	0.4	0.7	0.5	0.8	0.8	0.6
ビーチバレー	0	平均	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
スケート	7	平均	4.4	3.9	4.0	4.1	4.1	4.1	4.6	4.7	3.9	4.0	4.6	4.1	4.7	4.7	4.6	3.7
		標準偏差	0.5	0.9	0.6	0.7	0.9	0.9	0.5	0.5	0.9	0.6	0.5	0.7	0.5	0.5	0.5	1.1
スキー	16	平均	4.1	4.5	4.7	4.8	4.5	4.4	4.6	4.7	4.4	4.4	4.6	4.4	4.8	4.6	4.4	4.0
		標準偏差	0.8	0.5	0.5	0.4	0.7	1.0	0.6	1.0	1.0	0.6	1.0	1.0	0.4	0.6	1.0	0.7
マリンスポーツアクティビティ	2	平均	4.0	4.0	4.0	3.5	4.5	3.0	5.0	5.0	5.0	4.5	4.5	5.0	5.0	5.0	4.0	4.0
		標準偏差	0.0	0.0	1.4	0.7	0.7	1.4	0.0	0.0	0.0	0.7	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ヨット	17	平均	4.5	4.6	4.5	4.6	4.8	4.7	4.8	4.9	4.7	4.5	4.9	4.8	4.8	4.6	4.3	4.7
		標準偏差	0.6	0.5	0.5	1.0	0.4	0.5	0.4	0.3	0.5	0.5	0.3	0.4	0.4	0.8	0.8	0.5
シーズン全体	77	平均	4.5	4.4	4.5	4.6	4.5	4.4	4.6	4.8	4.5	4.4	4.8	4.5	4.7	4.5	4.3	4.2
		標準偏差	0.7	0.7	0.6	0.7	0.7	0.8	0.6	0.6	0.7	0.6	0.6	0.7	0.5	0.7	0.8	0.7

3）講義・演習科目の授業評価

講義・演習科目の授業評価についての結果を図Ⅲ-1-4（春学期）、図Ⅲ-1-5（秋学期）に示した。ほとんどの項目とも平均値で4点をこえる肯定的評価が得られている。特に昨年度同様、「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」は高い値を示した。（春：4.5±0.7、秋：4.5±0.5）また、「自分はこの授業に意欲的に取り組んだ」の項目は低値を示す結果であった。これらのことは、やや教員側の一方的な授業になりがちであるのかもしれない。学生が授業に意欲的に取り組めるような授業づくりを目指す必要があると考えられる。



図Ⅲ-1-4. 授業に関する質問項目別の5段階評価（春学期講義・演習全体平均）



図Ⅲ-1-5. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期講義全体平均）

3．通信教育対象科目

1）体育理論

レポートおよび試験問題の出題・採点を石手靖君、野口和行君、奥山靜代君で担当した。

2）体育実技スクーリング

平成27年８月５日から８月10日の連続６日間９種目を日吉キャンパスにて実施した。９種目のうち４種目は「スポーツクラス」という１単位の授業であり５種目は「スポーツセミナー」という２単位の授業であった。スポーツクラスは実技と講義から構成されるのに対し、スポーツセミナーは講義と演習から構成される。これらの種目・担当者・定員・履修者数等を表Ⅲ-1-12に示す。

表Ⅲ-1-12. 平成27年度通信教育部体育実技スクーリング開講種目および担当者一覧

種目名			担当者	定員	履修者数	充足率
夏期	スポーツクラス	ゴルフ	勝又　正浩	20	18	90%
		卓球	木林　弥生	30	13	65%
		バスケットボール	加藤　大仁	25	12	40%
		フットサル	須田　芳正	25	10	40%
	スポーツセミナー	太極拳	孔　徳勝	20	19	95%
		フィットネストレーニング	山内　賢	25	21	84%
		ピラティス(健康身体作り)	板垣　悦子	20	20	100%
		水泳	鳥海　崇	20	19	95%
		テニス	村松　憲	20	17	85%
合計				205	149	73%

4．塾内における授業担当

日吉、三田及び芝共立において開講される体育研究所設置の体育科目および通信教育部のテキスト科目・スクーリング科目に加え、各学部の設置科目の開講についても協力している。平成27年度の他学部設置科目及び担当者を表Ⅲ-1-13に示す。

表Ⅲ-1-13. 塾内における授業担当および協力

授 業 科 目 名	担 当 者	開講学部など	曜日時限など
薬学生のための体験学習プログラム	板垣　悦子	薬学部	春秋学期金曜日放課後
体育Ⅰ	野口　和行	総合政策学部 環境情報学部	春学期月曜２・３時限
体育Ⅱ・Ⅲ（野外スポーツ）	野口　和行	総合政策学部 環境情報学部	春学期月曜２・３時限
体育Ⅰ	村山　光義	総合政策学部 環境情報学部	春学期金曜２時限
体育Ⅱ・Ⅲ （レクリエーションスポーツ、フライングディスク）	村山　光義	総合政策学部 環境情報学部	秋学期金曜２時限（レクリエーションスポーツ）・春秋金曜３時限（フライングディスク）
体育２～５（水泳）	鳥海　　崇	総合政策学部 環境情報学部	春学期月曜２限
人体の科学	佐々木玲子 村山　光義	理工学部	秋学期水曜５時限

Ⅲ－２　スポーツイベントの開催

１．塾長杯・塾内競技大会

１）塾長杯バレーボール大会

１．開催日：平成27年６月６日（土）
２．会　場：日吉記念館
３．開催時間：９:00～17:00
４．参加チーム数：28チーム
５．参加者数：約319名
（登録選手数199名、教職員約20名、観客約100名）
６．試合数：試合（最高６試合、最低２試合）
７．協　力：大会実行学生スタッフ
放送研究会（K-Sound）
８．参加チーム抽選会
平成27年５月25日（月）16:30～17:30
スポーツ棟（体育研究所）２F 会議室
９．応募チーム数：26チーム（募集数範囲内のため抽選なし）
10．表彰チーム
チャンピオンリーグ
優勝：海老澤 JAPAN２
２位：～The last message～なかけん会
３位：慶應バレーボール愛好会
ボンゴレビアンコ
エンジョイリーグ
優勝：SOUTA
２位：Fine32nd
３位：気象予報研究会 RAIN
君も☆ラブライバー
11．コメント
本大会は、チャンピオンリーグ10チーム、エンジョイリーグ18チームが参加した。チャンピオンリーグは５チーム２ブロックに分かれ各２試合ずつの予選を行い、各ブロック３位までが決勝トーナメントに進出した。エンジョイリーグは３チーム６ブロックに分かれ、こちらは各ブロック１位が決勝トーナメントを戦った。
チャンピオンリーグ、エンジョイリーグともに、白熱した試合が展開され、会場は大いに盛り上がった。

２）塾長杯フットサル大会

１．開催日：平成27年７月４日（土）
２．会　場：日吉記念館
３．開催時間：９:00～17:00
４．参加チーム数：32チーム
５．参加者数：約349名
（登録選手数229名、教職員約20名、観客約100名）
６．試合数：52試合（最高６試合、最低３試合）
７．協　力：体育会ソッカー部審判
放送研究会（K-Sound）
８．参加チーム抽選会
平成27年６月22日（月）16:30～17:30
スポーツ棟（体育研究所）２F 会議室
９．応募チーム数：49チーム
10．表彰チーム
優勝：ボンバーよねはら
２位：FC ストラトス
３位：薬サカ First
さるしむ
11．コメント
本大会では、代表者を抽選会当日に集め、参加チームを決定する抽選会を経て開催される。本年度は、抽選会により選ばれた31チームと教職員チームを合わせた計32チームにおいて大会が行われた。
日吉記念館に３コート作り、予選リーグは、12分間×１本、決勝トーナメントは15分間の一発勝負で優勝の栄光を賭けた激しい試合がいくつも繰り広げられた。今大会では、教職員チームも決勝トーナメントに進出する活躍を見せた。大会を通して、レベルの高い白熱した試

合がいくつも観られた。

3）塾長杯バスケットボール大会

1．開催日：平成27年12月12日（土）
2．会　場：日吉記念館
3．開催時間：9:00～17:00
4．参加チーム数：24チーム（アルティメットリーグ12、エンジョイリーグ12）
5．参加者数：約300名
（登録選手数約240名、教職員約10名、観客約50名）
6．試合数：66試合（最高7試合、最低5試合）
7．協　力：大会実行学生スタッフ
放送研究会（K-Sound）
審判団（日体大）
8．参加チーム抽選会
平成27年11月30日（月）16:30～17:30
スポーツ棟（体育研究所）2F会議室
9．応募チーム数
アルティメットリーグ：13チーム
エンジョイリーグ：20チーム
10．表彰チーム
アルティメットリーグ
優勝：リューネンズ
2位：always
エンジョイリーグ
優勝：GBB
2位：国際関係会（I.I.R）
11．コメント
本大会は、抽選会によって選ばれた、アルティメットリーグ12チーム、エンジョイリーグ12チームで大会が行われた。開催は12月の寒い時期だったが、日吉記念館は各チームの汗と熱気で大変盛り上がった。いずれの試合も好ゲームだったが、団結力・組織力が相手チームより上回っていたリューネンズ、GBBが各リーグで優勝カップを手にした。

4）新春塾内卓球大会

1．開催日：平成28年1月16日（土）
2．会　場：スポーツ棟（体育研究所）
地下1階卓球場
3．開催時間：10:00～15:00
4．参加者数：45名
（塾生、教職員及び卒業生45名、学生スタッフ4名）
（シングルス21名、ダブルス14ペア）
5．ゲーム形式
11点先取3セットマッチ
6．表彰チーム
ダブルス（中・上級の部）
優勝：春山雄哉（法2年）
西尾泰彦（経済1年）
準優勝：守友康一（環境4年）
K　（総合3年）
ダブルス（温泉の部）
優勝：渡邉　丈（経済1年）
※ペア確認できず
準優勝：町井湧介（理工3年）
星尾崇之（医5年）
シングルス（上級の部）
優勝：星野泰輔（理工3年）
準優勝：西尾泰彦（経1年）
シングルス（中級の部）
優勝：嶋本顕人（医3年）
準優勝：中山栞里（経済1年）
シングルス（温泉の部）
優勝：八幡真幸（経済1年）
準優勝：村松　憲（体育研究所）
7．コメント
毎年卓球大会はお正月明けに開催されている。他のスポーツ大会とは異なり、極めてアットホームな雰囲気の中で行われるのが、この卓球大会である。今年も塾生だけでなく卒業生、職員らも参加した。シングルス21名、ダブルス14ペアが出場し、手に汗握るゲームが展開された。運営は体育研究所非常勤講師の木林

君のサポートもあり、スムーズに行われた。

2．公開講座

1）ヨガ・ピラティス

⑴　日　程：

①ピラティス

平成27年５月14日（木）、21日（木）、28日（木）

②ヨガ

平成27年10月21日（水）、28日（水）、11月４日（水）、11日（水）

⑵　会　場：協生館エクササイズスタジオ

⑶　開催時間：18:30～19:30

⑷　講　師：

①板垣悦子（体育研究所准教授）

②杉本亮子（体育研究所非常勤講師）

⑸　参加者数：

①15名（男性１名、女性14名）

②17名（男性２名、女性15名）

⑹　受講料：2,500円

⑺　コメント：

例年好評いただいている本講座は、今回も多くの方にご参加いただき、ヨガ・ピラティスを体験していただいた。本年度は、地域の方の参加も増え、地域社会に対するスポーツ振興活動が進んでいることが感じられるイベントとなった。今後も、地域の方も含めて、多くの方に参加いただけるように企画していきたい。

3．教養研究センター日吉行事企画委員会共催企画

FIFA 女子ワールドカップ　カナダ 2015 決勝 日本代表を応援しよう！

⑴　日　程：平成27年７月６日（月）

⑵　会　場：協生館藤原記念ホール

⑶　開催時間：7:50～10:00

⑷　講　師：岩崎　陸

（体育研究所非常勤所員）

⑸　参加者数：約200名

⑹　コメント：

昨年に引き続き、日吉行事企画委員会HAPPの新入生歓迎企画として、ワールドカップ応援企画を開催した。多くの塾生が日本代表を応援する光景は、スポーツによって勇気づけられる、同じ思いを抱くことができるという魅力を改めて感じることとなった。今後もスポーツ応援企画を計画し、「見る」スポーツの魅力を伝えていきたい。

4．所内施設の開放

1）プール一般開放

⑴　期　間：

【春学期】平成27年５月７日（木）
～７月21日（火）
※月・火・水・木

【秋学期】平成27年10月５日（月）
～12月25日（木）　※月・水

⑵　時　間：12:15～13:00

⑶　場　所：協生館プール

⑷　対象者：学部生、大学院生（留学生含）

⑸　受付・監視：

【春学期】

月：小松えり 君（法学部２年）
牧原花菜 君（経済学部２年）
火：岡安弘暉 君（理工学部２年）
塩川　拓 君（経済学部２年）
水：木村亮太 君（法学部３年）
田端凌也 君（理工学部２年）
木：木村　幹 君（経済学部２年）
中村彩夏 君（文学部２年）

【秋学期】

月：小松えり 君（法学部２年）
岡安弘暉 君（理工学部２年）
水：岸本隆誠 君（法学部２年）
横田貴大 君（法学部２年）

⑹　利用者数：延べ471名

【春学期】延べ350名
（延べ男子304名、女子46名）

【秋学期】延べ121名
（延べ男子109名、女子12名）

⑺　コメント：

本年度は、春学期に開放日を増やし、多くの塾生が利用できるように企画した。その結果、春学期のみで昨年度の利用者数を超す塾生が利用した。昼休みという短い時間ではあるが、プールを利用したいという塾生の思いが出ている結果といえる。今後も、安全を第一に考え、塾生の思いに答えられるように開放を企画していきたい。

2）協生館トレーニングルーム一般開放

⑴　期　間：

【春学期】
平成27年５月７日（火）～７月13日（月）

【秋学期】
平成27年10月１日（木）
～平成28年１月15日（金）

⑵　曜日時間：

【春学期】月・木・金（16:30～18:00）

【秋学期】月・水・金（16:30～18:00）
火（15:00～16:30）
木（15:00～18:00）

⑶　担当者

【春学期】

月：下村柚香 君（商学部２年）
木：岡﨑智恵美 君（商学部２年）
金：永田直也 / 福士徳文（助教）

【秋学期】

月：瀬水ひかり 君（理工学部１年）
火：森　玲奈 君（理工学部１年）
水：宍戸りさ 君（理工学部３年）
木：佐藤理沙 君（商学部１年）
金：永田直也 / 福士徳文（助教）

⑷　利用者数：707名
（春学期277名、秋学期430名）

⑸　コメント：

本年度は、塾生が日常的に運動できるよう、開放日を広げて実施した。春学期利用者数は低下したが、秋学期に向けた

え徐々に増加してきた。これは、トレーニングルーム開放の広報がうまくいかず、開放開始時に利用者が少ないことが原因としてあげられる。塾生からは、開放の日程を問い合わせる連絡もあり、開放への要望は高い。多くの塾生に開放を伝えられるよう、広報の方法も検討していく必要がある。

3）多目的コートの貸出

⑴　曜日時間：平日　授業終了後
　　土日　終日可

⑵　利用状況：91団体
（春学期53団体、秋学期38団体）

⑶　日数：141日 / 69日稼働
（春学期66日 / 41日稼働、秋学期75日 / 28日稼働）

⑷　コメント：

本年度の多目的コートの貸出は、前年に比べて利用団体数が少なく、稼働率もほぼ50％であった。これは、一部の団体しか貸出の存在を知らない可能性があるため、塾生のスポーツ活動機会を増やすためにもより多くの団体が利用できるように企画していく。

Ⅲ－３　他機関との連携

１．公開講座

１）慶應義塾大学・読売新聞社　横浜市民講座

「東京五輪を考える～ジュニアアスリートの育成～」（全５回）

第４回

タイトル：「陸上競技場でスポーツ体験　―オリンピック会場の広さを体験しよう―」

日　　程：平成27年７月11日（土）

会　　場：日吉キャンパス　陸上競技場

開催時間：14:00～15:30

対 象 者：誰でも参加可（定員：100名）

講　　師：野口　和行，板垣　悦子

参加者数：約30名

受 講 料：無料

２．一貫校連携

１）幼稚舎館山遠泳合宿（水泳指導教員）

日　　程：平成27年７月21日（火）～23日（木）

会　　場：千葉県館山市見物海岸

対 象 者：６年生

講　　師：石手　靖，鳥海　崇，福士　徳文

※天候不良の為、参加できず

３．体育会支援

綿田　博人　体育会副理事、高等学校硬式野球部特別招聘コーチ

石手　靖　　体育会参与

吉田　泰将　剣道部師範、医学部剣道部師範代行

加藤　幸司　バトミントン部ヘッドコーチ

須田　芳正　ソッカー部監督

鳥海　崇　　体育会副理事（９月30日まで）、水泳部水球部門コーチ

坂井　利彰　体育会副理事（10月１日より）、庭球部監督

福士　徳文　ソッカー部コーチ

Ⅳ. 業務活動記録

Ⅳ．業務活動記録

平成27年度総務分野関係報告

1　人　事

⑴　就任（継続）
　福士徳文君（助教（有期））（４月１日付）
⑵　就任（継続）
　永田直也君（助教（有期））（４月１日付）

2　塾内役職

⑴　教職員評議員
　石手　靖君（所長）
⑵　大学寄宿舎舎監
　近藤明彦君（～９月30日）
　野口和行君（10月１日～）
⑶　大学寄宿舎委員会委員
　近藤明彦君（～９月30日）
　野口和行君（10月１日～）
⑷　大学教養研究センター運営委員
　石手　靖君（所長）
⑸　大学教養研究センター所員
　近藤明彦君、石手　靖君、村山光義君、
　吉田泰将君、加藤大仁君、野口和行君、
　村松　憲君、佐々木玲子君、山内　賢君
⑹　大学学生総合センター副部長（日吉支部）
　村山光義君
⑺　体育会副理事
　綿田博人君
　鳥海　崇君（～９月30日）
　坂井利彰君（10月１日～）
⑻　体育会参与
　石手　靖君（所長）
⑼　極東証券寄附講座「生命の教養学」企画委員
　鳥海　崇君（～９月30日）
　板垣悦子君（10月１日～）
⑽　日吉行事企画委員会（HAPP）委員
　石手　靖君
⑾　立科山荘運営委員会委員
　野口和行君
⑿　日吉キャンパス公開講座運営委員会委員
　佐々木玲子君
⒀　日吉記念館運営連絡協議会委員
　石手　靖君、加藤幸司君、鳥海　崇君
　（～９月30日）
⒁　慶應義塾研究倫理委員会研究倫理審査委員会
　佐々木玲子君
⒂　大学保健管理センター運営委員
　石手　靖君（所長）
⒃　大学スポーツ医学研究センター運営委員
　石手　靖君（所長）
⒄　日吉キャンパス衛生委員
　山内　賢君
⒅　Hiyoshi Research Portfolio（HRP）運営委員
　石手　靖君（所長）
⒆　Hiyoshi Research Portfolio（HRP）実行委員
　村山光義君
⒇　通信教育部学務委員
　村松　憲君

3　研究所内役職の主なもの

⑴　所　長
　石手　靖君
⑵　人事委員会委員
　石手　靖君、植田史生君、近藤明彦君、
　佐々木玲子君、綿田博人君、村山光義君、
　加藤大仁君
⑶　学習指導主任
　野口和行君
⑷　学習指導副主任
　須田芳正君（～９月30日）
　村松　憲君（10月１日～）
⑸　総務委員会委員長
　吉田泰将君
⑹　教育委員会委員長
　野口和行君
⑺　研究委員会委員長
　村山光義君
⑻　スポーツ振興委員会委員長
　加藤幸司君
⑼　将来構想委員会委員長
　村松　憲君
⑽　活動報告書編集委員会委員長
　吉田泰将君

4　その他

⑴　未来先導基金公募プログラム「剣道の国際交流およびハーバード大教育制度の体験プログラム」を実施した。
　活動代表者　植田史生君
　日　　程　2015年11月18日～24日

⑵　塾派遣留学について
　鳥海　崇君
　留 学 先　イギリス
　期　　間　2015年10月15日～2016年９月30日

（主事　黒田修生）

平成27年度活動報告書

平成28年７月１日発行

［非売品］

編　集：活動報告書編集委員会
吉田　泰将（委員長）
須田　芳正　　奥山　静代　　坂井　利彰
永田　直也　　福士　徳文

発　行：慶應義塾大学体育研究所
〒223-8521　横浜市港北区日吉４－１－１

制　作：(有)梅沢印刷所
〒108-8345　東京都港区三田２－15－45